

—— 千葉県市原市 ——

# 皿 郷 田 茂 遺 跡

1 9 8 4

市 原 市 教 育 委 員 会  
市 原 市 加 茂 土 地 改 良 区  
財 団 法 人 市 原 市 文 化 財 セ ン タ ー



## 序 文

本市は、房総半島東京湾岸の中央部に位置し、地理的にも気候的にも恵まれ、永く歴史の舞台としての埋蔵文化財が豊富に認められております。また、昭和30年代後半より、京葉工業地帯の造成が始まり、このため、地域開発の進行による文化財保護との調和の必要性が高まっております。

今回の調査地区である皿郷田茂遺跡は、市原市平野地先のほ場整備事業に伴う記録保存を目的とする調査であり、文化庁の国庫補助事業として、農業基盤整備事業等と埋蔵文化財の保護との関係の調整について、関係機関の協力をいただき実施いたしました。

本報告書は、この調査の成果をまとめたものであり、今後の文化財保護活用的一端として役立つことができれば幸いと存じます。

調査にあたりましては、千葉県教育庁文化課、千葉県市原土地改良事務所、地元土地改良区等の方々に御協力をいただき厚くお礼申し上げます。

昭和59年3月

市 原 市 教 育 委 員 会

教育長 星 野 一 郎

## 例 言

1. 本書は、千葉縣市原市平野地先の団体営ほ場整備事業に先行して実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 本書に所収する内容は、昭和58年度に調査の対象となった千葉縣市原市平野69番地先に所在する「皿郷田茂遺跡」についての資料報告である。
3. 発掘調査は、調査対象面積 6,100m<sup>2</sup>のうち、200m<sup>2</sup>を文化庁の国庫補助事業として、市原市教育委員会文化課が実施し、残り 5,900m<sup>2</sup>については農林水産省の補助金を受けた、市原市加茂土地改良区の依頼により、千葉県教育委員会、市原市教育委員会の要請と指導のもとに、財団法人市原市文化財センターが実施した。
4. 文化庁補助金分の調査は昭和58年10月14日から昭和58年11月18日まで実施し、整理を昭和59年1月10日から昭和59年1月30日まで実施した。また、土地改良区依頼分の調査は、昭和58年10月14日から昭和58年12月19日まで実施し、その後昭和59年2月29日まで整理を実施した。
5. 調査及び整理は、市原市教育委員会文化課学芸員 田中清美及び財団法人市原市文化財センター主任調査研究員 山口直樹が担当した。
6. 本書の作成・執筆は山口直樹が担当した。
7. 調査及び本書の作成にあたっては、千葉県教育庁文化課、千葉縣市原市土地改良事務所、市原市加茂土地改良区の関係者各位をはじめとして、多くの方々の御指導、御協力をいただいた。



## 調 査 組 織

(文化庁補助金分)

調 査 員                      田 中 清 美                      市原市教育委員会文化課学芸員

事 務 局

事務局長                      山 口 唯 一                      市原市教育委員会文化課長

書 記                      矢 島 秀 朗                      市原市教育委員会文化課長補佐

書 記                      伊 藤 慶 一                      市原市教育委員会文化課主事

(農林負担分)

財団法人 市原市文化財センター

常務理事                      井 原 茂

庶 務 課 長                      小 茶 文 夫

主                      事                      浅 利 幸 一

主 事 補                      相 野 光 江

調 査 課 長                      郷 田 良 一

主任調査研究員                      山 口 直 樹

(兼) 調査研究員                      浅 利 幸 一

調 査 研 究 員                      森 本 和 男

調 査 研 究 員                      近 藤                      敏

調 査 研 究 員                      高 橋 康 男

調 査 研 究 員                      田 所                      真

調 査 員                      鈴 木 英 啓

調 査 員                      寺 島                      博

# 皿 郷 田 茂 遺 跡

## 目 次

### 序 文 例 言

|                |    |
|----------------|----|
| I 調査に至る経緯と調査経過 | 1  |
| 1. 調査に至る経緯     | 1  |
| 2. 調査の経過       | 1  |
| II 遺跡の位置と地理的環境 | 2  |
| III 遺跡の歴史的環境   | 7  |
| IV 調査の方法       | 10 |
| 1. 発掘の方法       | 10 |
| 2. 整理の方法       | 10 |
| V 基本層序         | 13 |
| VI 遺構と出土遺物     | 15 |
| 1. 遺構の種類と分布    | 15 |
| 2. 1号遺構        | 17 |
| 3. 2号遺構        | 17 |
| 4. 3号遺構        | 21 |
| 5. 4号遺構        | 24 |
| 6. 5号遺構        | 26 |
| 7. 6号遺構        | 26 |
| 8. 7号遺構        | 26 |
| 9. 8号遺構        | 28 |
| 10. 9号遺構       | 30 |
| 11. 10号遺構      | 30 |
| 12. 11号遺構      | 33 |
| 13. 遺構外出土遺物    | 33 |
| VII ま と め      | 37 |

## 挿 図 目 次

|                            |    |
|----------------------------|----|
| 図 1. 皿郷田茂遺跡周辺地形及び遺跡分布図     | 3  |
| 図 2. 皿郷田茂遺跡周辺地形図           | 4  |
| 図 3. 皿郷田茂遺跡地形図             | 5  |
| 図 4. 皿郷田茂段丘面エレベーション図       | 8  |
| 図 5. グリッド配置及び遺構分布図         | 11 |
| 図 6. 先土器確認グリッド配置及び遺跡内基本土層図 | 14 |
| 図 7. 1 号遺構及び出土遺物実測図        | 16 |
| 図 8. 2 号遺構実測図 (1)          | 18 |
| 図 9. 2 号遺構実測図 (2)          | 19 |
| 図10. 2 号遺構遺物実測図            | 20 |
| 図11. 3 号遺構実測図              | 22 |
| 図12. 3 号遺構及び出土遺物実測図        | 23 |
| 図13. 4 号遺構及び出土遺物実測図        | 25 |
| 図14. 5 号及び 6 号遺構実測図        | 27 |
| 図15. 7 号遺構実測図              | 28 |
| 図16. 8 号遺構実測図              | 29 |
| 図17. 9 号遺構実測図              | 31 |
| 図18. 10号遺構及び出土遺物実測図        | 32 |
| 図19. 11号遺構及び出土遺物実測図        | 34 |
| 図20. 遺構外出土遺物実測図            | 35 |
| 図21. 遺構外出土遺物拓影図            | 36 |

## 図 版 目 次

|          |                                                          |
|----------|----------------------------------------------------------|
| 図版 1. 遺跡 | 皿郷田茂遺跡周辺の航空写真 (北から)                                      |
| 図版 2. 遺跡 | 1. 皿郷田茂遺跡調査区域航空写真 (北から)<br>2. 遺跡遠景 (西側よりのぞむ)             |
| 図版 3. 遺跡 | 1. 調査区南西側遺構群検出状況 (南側よりのぞむ)<br>2. 調査区南西側遺構群検出状況 (東側よりのぞむ) |
| 図版 4. 遺跡 | 1. 調査区南西側遺構検出状況 (西側よりのぞむ)                                |

2. 調査区南西側遺構検出状況 (南側よりのぞむ)
  3. 調査区南西側遺構検出状況 (北西側よりのぞむ)
- 図版5. 遺構
1. 1号遺構(住居跡)全景 (南東側よりのぞむ)
  2. 1号遺構遺物出土状況 (南東側よりのぞむ)
  3. 1号遺構南東壁際遺物出土状況 (北西側よりのぞむ)
- 図版6. 遺構
1. 2号遺構(円形周溝墓)全景 (西側よりのぞむ)
  2. 2号遺構C'-C土層セクション (北側よりのぞむ)
  3. 2号遺構B'-B土層セクション (北側よりのぞむ)
- 図版7. 遺構
1. 2号遺構(円形周溝墓)南西付近近景 (北西側よりのぞむ)
  2. 2号遺構南側近景 (東側よりのぞむ)
  3. 2号遺構東側近景 (南西側よりのぞむ)
- 図版8. 遺構
1. 3号遺構(方形周溝墓)全景 (南東側よりのぞむ)
  2. 3号遺構南西溝近景 (南東側よりのぞむ)
- 図版9. 遺構
1. 3号遺構(方形周溝墓)全景 (南西側よりのぞむ)
  2. 3号遺構南東溝近景 (北東側よりのぞむ)
- 図版10. 遺構
1. 4号遺構(方形周溝墓)全景 (南東側よりのぞむ)
  2. 4号遺構北東溝近景 (北西側よりのぞむ)
  3. 4号遺構南西溝近景 (北西側よりのぞむ)
- 図版11. 遺構
1. 5号遺構(方形周溝墓)全景 (東側よりのぞむ)
  2. 6号遺構(方形周溝墓)全景 (東側よりのぞむ)
- 図版12. 遺構
1. 7号遺構(方形周溝墓)全景 (北側よりのぞむ)
  2. 8号遺構(方形周溝墓)全景 (北側よりのぞむ)
- 図版13. 遺構
1. 9号遺構(方形周溝墓)全景 (東側よりのぞむ)
  2. 9号遺構西溝近景 (南側よりのぞむ)
  3. 9号遺構東溝近景 (南側よりのぞむ)
- 図版14. 遺構
1. 10号遺構(甕棺墓)全景 (南側から)
  2. 10号遺構全景 (西側から)
  3. 10号遺構 (西側から)
- 図版15. 遺構
1. 11号遺構(溝)全景 (南東側よりのぞむ)
  2. 11号遺構全景 (北西側よりのぞむ)
- 図版16. 遺物
- 図版17. 遺物

## I 調査に至る経緯と調査経過

### 1. 調査に至る経緯

市原市平野地区における団体営圃場整備事業の着工にさきがけ、昭和55年5月15日付けで、市原市長 井原恒治より、事業地域の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会が、千葉県教育委員会教育長及び市原市教育委員会教育長宛に提出された。それを受けて、現地踏査とテストピットを実施した結果、昭和55年12月19日付けで、千葉県教育委員会教育長より土師器散布地1カ所の回答が得られた。その取扱いについて千葉県教育庁文化課、千葉県市原土地改良事所、高滝ダム周辺整備対策室、市原市加茂土地改良区並びに市原市教育委員会による再々の協議の結果、盛土する区域については現状保存、削平する区域については記録保存する結論とされた。

調査は、記録保存区域約 6,100㎡の内、5,900㎡（調査総額の80％）を、農林水産省の負担とし、残り 200㎡（調査総額の20％）を文化庁の国庫補助事業として、昭和58年10月14日より開始された。

（市 原 市 教 育 委 員 会 文 化 課）

### 2. 調査の経過

皿郷田茂遺跡の発掘調査は、昭和58年10月14日から12月19日まで実施し、整理は12月20日から2月29日まで行なった。

#### 発掘作業

昭和58年10月14日に調査を開始した。調査区南東側から重機によってトレンチを入れ、遺構の状態の確認を始めた。杭打ちも同時に行なった。

10月24日から遺構が確認された区域の拡張を始めた。

10月28日から実測を開始した。

11月28日に確認トレンチ及び拡張部の表土除去を終了した。

12月12日からローム質土層以下の調査を開始した。

12月19日をもって発掘調査をすべて終了した。

#### 整理作業

昭和58年12月20日から整理作業を開始した。1月12日までに遺物実測及びトレース等を終え挿図・写真図版の作成を始める。

2月29日にすべての挿図・写真図版の作成及び原稿の執筆を終え、整理作業は終了した。

## II 遺跡の位置と地理的環境

市原市は千葉県の中央南西寄り、房総半島の西側の付け根付近に位置している。地形的には、北部に洪積世台地（下総台地）が、南部に丘陵地帯（上総丘陵）が広がり、これらは中央部を南から北に向かって流れる養老川によって開析され、両岸に沖積低地と河岸段丘が形成されている。

この養老川における沖積地は、北部下流域では比較的広い展開を見せているが、南部中・上流域では急激に狭くなり、また複雑に蛇行する本流及び多くの支流によって、低地平坦面はさらに小範囲に分断されてしまっている。また、中～下流域に著しく発達した河岸段丘は、基本的には三段の面に分かれ、これも下流域では、連続した比較的広い平坦面であるが、上流に向かうほど、不連続な狭い面になる。

皿郷田茂遺跡は、養老川中流域に属し、上流域との境に近い沖積台地（河岸段丘面）に位置する。この台地は、現在の加茂中学校付近から北東方向に舌状に伸びており、上面は、南側から北に向かって緩やかな傾斜をもっている。北東及び南東側を養老川本流に、北側を支流である万田野川に、北西側を万田野川の支谷（現在は土地改良により埋め立てられている）に開析されている。付近の沖積地は幅約 600mほどで、両側を比高差約 100mの丘陵に挟まれている。地図上では狭い谷底の様に見えるが、遺跡に立ってみると、直下を流れる養老川との比高差が約19m、万田野川支谷との比高差15mあり、台地面を高く見せていることから、比較的広い空間に感じられる。また、沖積地平坦面とその中を流れる川や谷との関係は、下総台地における洪積世台地と沖積地との関係に近似し、平坦面の限られた上流域では、遺跡の立地にも同様の関係が見られる。

調査区は台地の北西側、万田野川の支谷に面した平坦面から肩部、一部傾斜面部に位置し、大正時代以降の水田化によって、斜面及び肩部は大きく掘削されており、1・3号遺構は斜面側を破壊されてしまっていた。

また、本遺跡の在る沖積地平坦面の地山については、上位の河岸段丘面において、その形成時期に応じた各期のローム土をのせていることが知られているが、沖積地も段丘面の一つでありながら、時期的に新しいためローム土の堆積はないとされている。

尚、遺構調査中に、覆土及び底面から握りコブシ大の河原石がまばらではあるが多く出土している。これは、付近の砂利層から入手したもので、この層は南西約 3 kmに位置する万田野を模式地とし、茂原から佐貫に北東―南西方向に伸びる「万田野層」であり、現在も南西約 1.7km付近で砂利採集が行われている。

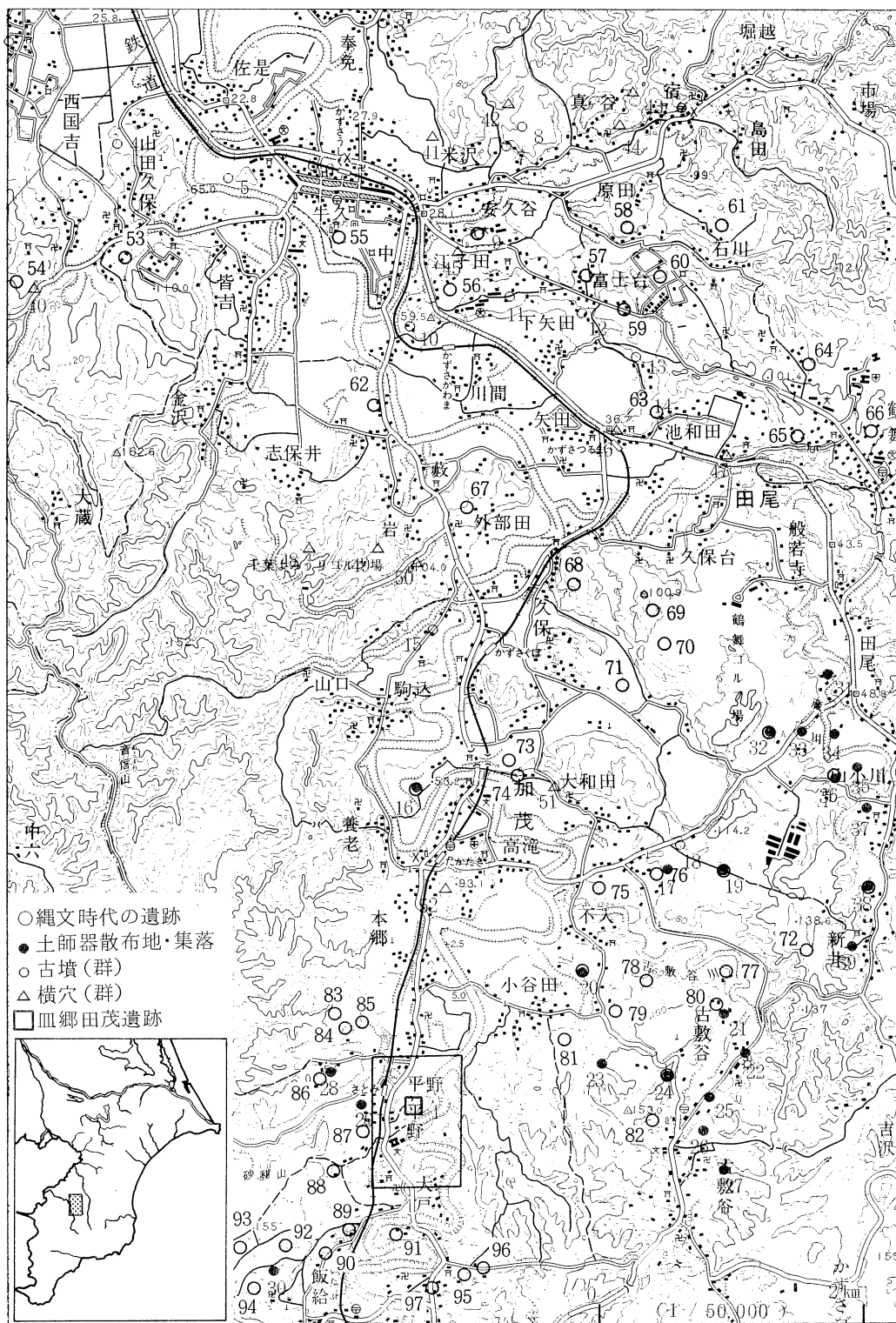


図1 血郷田茂遺跡周辺地形及び遺跡分布図

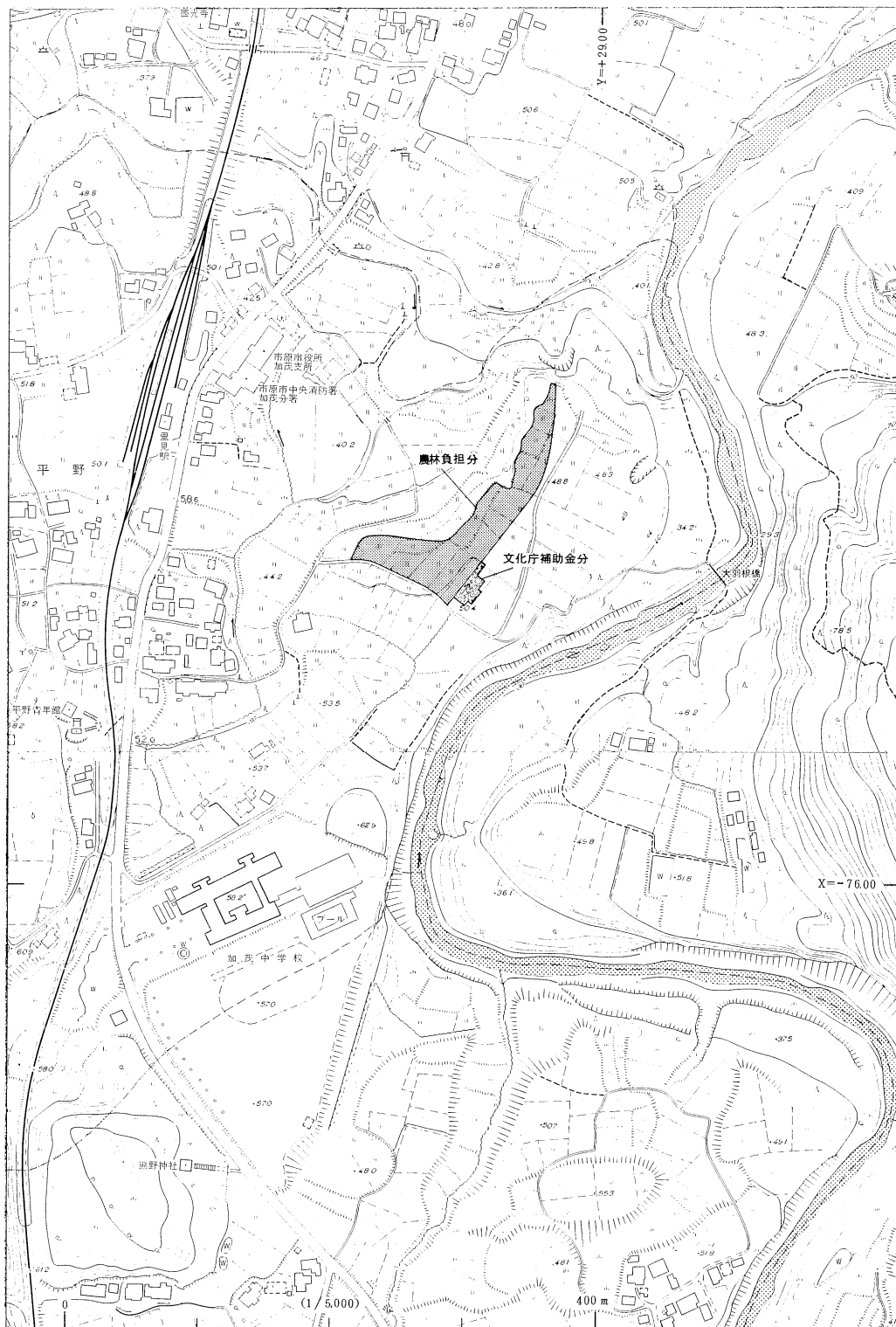


図2 皿郷田茂遺跡周辺地形図





图3 皿郷田茂遺跡地形图

### III 遺跡の歴史的環境

養老川流域においては各時期にわたって多くの遺跡が確認されているが、上流域、中流域、下流域では、その密度、立地などを異にしている、下総台地の展開する下流域では、遺跡は各時期にわたって密度が高く、台地の奥深くまで広がっている。また、個々の遺跡の規模も大きい。これに対し、牛久以南の中流域では、遺跡の密度が低くなり、洪積世台地がなくなって山地帯となるため養老川兩岸の河岸段丘面に集中するようになる。この状態は、本遺跡より上流約 1.5km の飯給付近まで続いている。また飯給より上流部においては段丘面の規模が小さくなるため遺跡数は急減し、点在するようになる。

皿郷田茂遺跡がある中流域の古墳時代の遺跡分布を見ると、本流と平蔵川の分岐するところまでは、河岸段丘が発達した右岸を中心に比較的規模の大きい古墳群、横穴群がみられる。しかし、平蔵川との分岐点より上流では墳墓は確認されておらず、横穴が2ヶ所に見られるだけであり、この地点を境に遺跡の在り方が大きく変わっている。ただ、土師器包含地は多く、平蔵川分岐点—古敷屋川分岐点間に形成された河岸段丘面上に分散して見られる。また、本流においても、番後台遺跡（1979～1980年、県文化財センター調査）、本遺跡の在る平野地区、上流の飯給地区などに分散して見られる（図1）。

平蔵川分岐点を境とした、このような遺跡の在り方の違いは当時の生産基盤の違いからくるものと思われ、これは、以下に記するような、地形的差に起因するものと思われる。

この地点を境にした下流部と上流部との地形の差を比べると、下流部まで展開していた、洪積世台地はここを境になくなってしまい、いわゆる台地平坦面は見られなくなる、また、下流域から続いて見られる洪積世河岸段丘面は、やはりここを境にして、分断、小規模化しており、広域な平坦面の確保は困難になっている。さらに、沖積世河岸段丘面においては、下流部では沖積面全体が幅広く、養老川の蛇行も緩いため、低地平坦面が広く続いており、また、河床との比高差が小さいため（約8m）低湿地的である。これに対して上流部は、沖積面の幅が狭いうえに、養老川の著しい蛇行によって分断されており、また河床との比高差が大きい（約20m）、台地的形態を呈している。養老川中流域における両者の違いは、当時の生産基盤及び集落立地に大きく影響を与えているものと思われる。

尚、皿郷田茂遺跡の上流約 2.3km に所在する番後台遺跡は古墳時代前半の集落跡で、発掘調査がほとんど行なわれていないこの地域にあって、重要な比較資料となっている。古墳時代前半の竪穴住居跡を79軒検出し、鉄製土掘り具先、石製紡錘車、土玉、石製模造品、玉類を出土している。

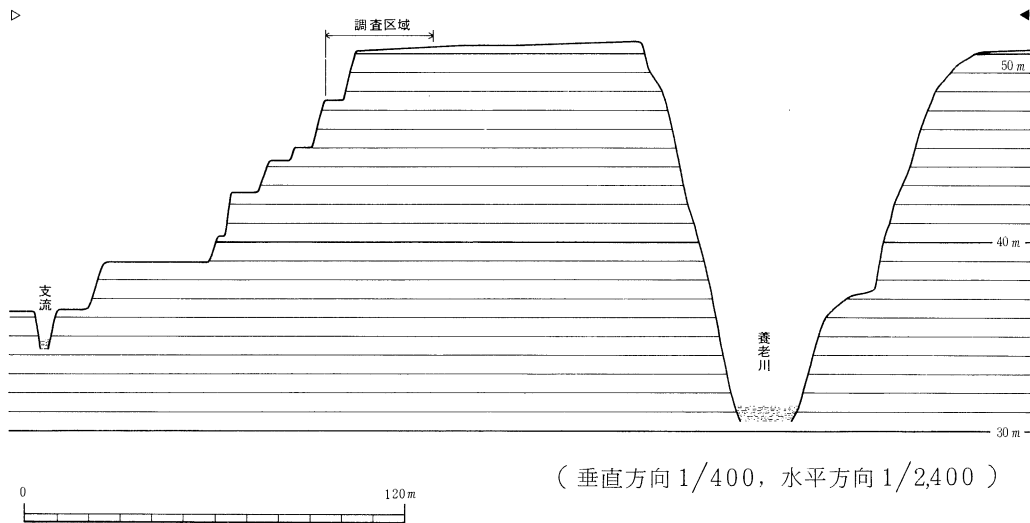


図4 皿郷田茂段丘面エレベーション図

皿郷田茂遺跡周辺の古墳  
及び土師式期集落

- |                  |                  |                  |
|------------------|------------------|------------------|
| 1. 皿郷田茂遺跡        | 18. 市分布調査遺跡No.31 | 37. 市分布調査遺跡No.13 |
| 2. 南岩崎古墳群        | 19. 市分布調査遺跡No.28 | 38. 市分布調査遺跡No.35 |
| 3. 奉免一妙高古墳群      | 20. 市分布調査遺跡No.41 | 39. 市分布調査遺跡No.37 |
| 4. 佐是古墳群         | 21. 市分布調査遺跡No.47 |                  |
| 5. 牛久城址古墳群       | 22. 市分布調査遺跡No.56 | 皿郷田茂遺跡周辺の横穴      |
| 6. 牛久古墳群         | 23. 市分布調査遺跡No.58 | 40. 西国吉横穴群       |
| 7. 稻荷古墳群         | 24. 市分布調査遺跡No.59 | 41. 境部田岱横穴群      |
| 8. 中岱古墳群         | 25. 市分布調査遺跡No.60 | 42. 真福寺台横穴群      |
| 9. 南総中遺跡         | 26. 市分布調査遺跡No.66 | 43. 殿部田横穴群       |
| 10. 六原古墳群        | 27. 市分布調査遺跡No.72 | 44. 真福寺前横穴群      |
| 11. 江子田古墳群       | 28. 市分布調査遺跡No.9  | 45. 南総中横穴群       |
| 12. 富士台古墳群       | 29. 市分布調査遺跡No.13 | 46. 池和田横穴        |
| 13. 別所遺跡         | 30. 市分布調査遺跡No.40 | 47. 池和田城横穴       |
| 14. 池和田古墳群       | 31. 市分布調査遺跡No.1  | 48. 藪横穴          |
| 15. 下駒込遺跡        | 32. 市分布調査遺跡No.3  | 49. 岩横穴群         |
| 16. 番後台遺跡        | 33. 市分布調査遺跡No.6  | 50. 外部田ヤツ横穴      |
| 17. 市分布調査遺跡No.15 | 34. 市分布調査遺跡No.4  | 51. 大和田横穴群       |
|                  | 35. 市分布調査遺跡No.11 | 52. 宮原横穴群        |
|                  | 36. 市分布調査遺跡No.12 |                  |

周辺の縄文時代遺跡

- |             |                  |                  |
|-------------|------------------|------------------|
| 53. 西国吉遺跡   | 68. 久保新畑遺跡       | 84. 明金台遺跡        |
| 54. 三ツ塚     | 69. 久保台遺跡        | 85. 市分布調査遺跡No.2  |
| 55. 丸山公園遺跡  | 70. 磐若寺台遺跡       | 86. 市分布調査遺跡No.10 |
| 56. 送り神遺跡   | 71. 永田遺跡         | 87. 上平野遺跡        |
| 57. 原田大六天遺跡 | 72. 市分布調査遺跡No.39 | 88. 市分布調査遺跡No.22 |
| 58. 白旗台遺跡   | 73. 久保堰の台遺跡      | 89. 平野丸塚         |
| 59. 富士台遺跡   | 74. 堰の上遺跡        | 90. 谷の上遺跡        |
| 60. 北富士台遺跡  | 75. 市分布調査遺跡No.33 | 91. 市分布調査遺跡No.29 |
| 61. 黄金台遺跡   | 76. 柏野遺跡         | 92. 市分布調査遺跡No.31 |
| 62. 藪遺跡     | 77. 市分布調査遺跡No.47 | 93. 中の台遺跡        |
| 63. 池和田遺跡   | 78. 市分布調査遺跡No.48 | 94. カウミ遺跡        |
| 64. 竜湊寺台遺跡  | 79. 市分布調査遺跡No.51 | 95. 上の原遺跡        |
| 65. 子来遺跡    | 80. 市分布調査遺跡No.53 | 96. 市分布調査遺跡No.30 |
| 66. 桐木台遺跡   | 81. 小谷田・中の台遺跡    | 97. 市分布調査遺跡No.41 |
| 67. 外部田西台   | 82. 市分布調査遺跡No.64 |                  |
| ・沖ノ台遺跡      | 83. 三角原遺跡        |                  |

尚、分布図の作成にあたっては、—1978年 千葉県企画部企画課『千葉県埋蔵文化財分布図』  
—及市原市で行なっている分布調査の成果を参考にした。

## IV 調 査 の 方 法

### 1. 発掘の方法

(1) 発掘区は、土地改良計画線の道路中心杭を基にした任意座標によって方眼を設定した。方眼は大グリッド (10m×10m) を基本とし、北東→南西方向を 3→27列、北西→南東方向を D→M列とし、この座標の組み合わせによって個々のグリッドの名称とした (例:3D)。また各大グリッドは 100の小グリッド (1m×1m) によって細区画した。小グリッドは北コーナーを00として東コーナーに向かって00→09、西コーナーに向かって00→90とし南コーナーは99と呼称した。尚、グリッドの方位は、南東→北西のラインが N-43.8°-W (磁北) である。

(2) 発掘は、まず南東→北西のグリッドラインに沿ったトレンチによって遺構の存在を確認し、遺構検出部、及び遺物集中出土部を拡張調査した。尚、表土除去はトレンチ、拡張部とも重機によった。

ローム層に関しては、調査対象区域の2%の確認グリッドを設定して調査したが、遺物は検出できなかった。

(3) 遺物は、遺構出土のものはポイントレベルを記録することを基本としたが、覆土中出土の小片は層位のための記録にとどめた。また表土除去時に出土した遺物はグリッドごとに取りあげた。

### 2. 整理の方法

整理は一般的な方法によった。表土中出土の縄文式土器は遺存の良好なもの及び代表的なもののみを扱った。

遺構から出土した土器は、器形の特徴がわかるものに限って実測した。

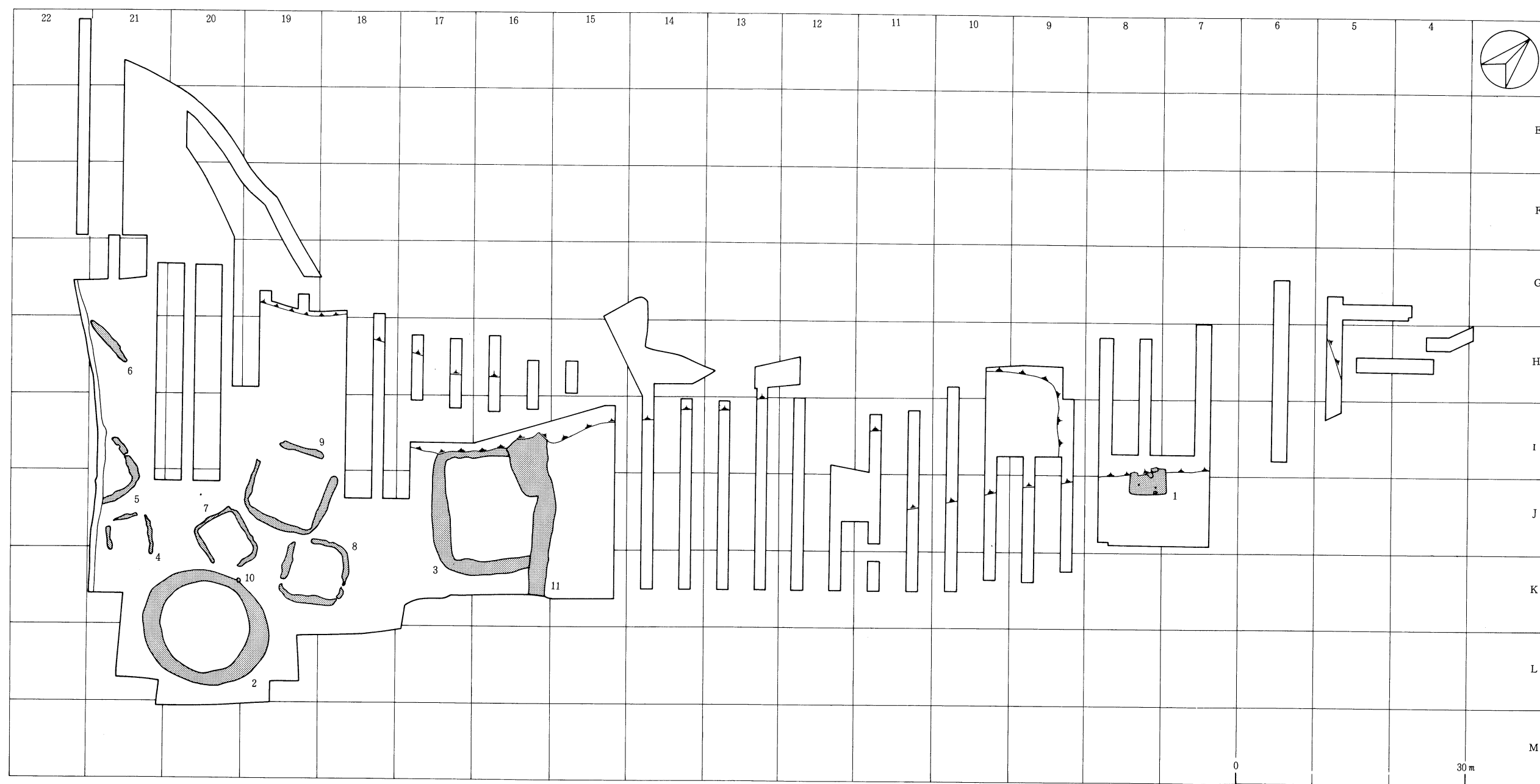


図5 グリット配置及び遺構分布図

## V 基 本 層 序

本報告II章で既述したように、皿郷田茂遺跡は養老川によって形成された段丘面上に立地している。木村泰治氏（1979「市原市の地形と地質」『市原市史・別巻』）によると、養老川両岸における段丘面は、その形成時期によって大きく四つに分けられ、上位の三段は洪積世に、最下位の一段は沖積世に属するとされている。このうち洪積世に形成された段丘面においては、旧河床面上にローム土を載せている。高位のものは下末吉ローム以上を、中位のものは武蔵野ローム以上を、下位のものは立川ロームをそれぞれ載せている。

また、沖積世に属する最下位の段丘面は、ローム層形成以後につくられており、この時期の沖積物が載っているという。

本遺跡は、このうち最下位の沖積世の段丘面に立地する。現地での観察によると、旧河床と思われる砂礫層が標高 46.40～46.70m以下にあり、この上に遺構確認地山となる厚さ 3 m程の堆積層が載っている。

旧河床面上にあるこの堆積層は、全体に粘性をおび、幾つかの層に分けることができる。今回の調査では、調査面積に対する 2 %のグリッドを入れて先土器時代の石器を含む遺物の確認に努めており、遺物の出土は皆無だったものの、この層についての記録を行なった（章末に記す）。

この層は全体的には、やや粘性が強く黒味がかっているものの火山性ガラスを含んでおり、ローム土に近似している。細分した各層の厚さは不均一で、堆積の仕方にも凹凸がある（図 6 参照）。河床面が下位に移ってからの堆積物であると思われるが、その成因については不明である。より高位の段丘面から流出したローム土の二次堆積層であろうか。

尚、VI章における各遺構の説明中では、この地山層の土を「ローム質土」とした。

- I 層 攪乱表土層。
- II 層 灰茶褐色層。粒子が細かく、粘性がある。
- III 層 灰黄褐色層。II層に近似するも明るさを増す。
- IV 層 淡暗黄褐色層。薄いチョコレート色を呈す。厚さは均一でなく、とぎれる部分も見られる。
- V 層 黄褐色層。最も明るい層。黒色粒を若干含んでいる。
- VI 層 暗茶褐色層。粒子は細かくしまりが有り粘性が強い。炭化粒をまばらに含んでいるが、b層は粒子が大きく層全体も黒味をおびている。
- VII 層 灰黄褐色層。粒子はやや粗いが、全体的にしまっている。部分的に明るい。
- VIII 層 淡暗茶褐色。極めて軟弱。グリッドの壁面においては水分を多く含み、10cmほどの厚さで板状に崩れ落ちる。
- IX 層 灰黄褐色層。粒子は粗くしまりを欠く。
- X 層 灰暗茶褐色層。粒子は粗くしまりを欠く。本層中には、部分的に 1～4 cmの厚さの砂層が見られる。

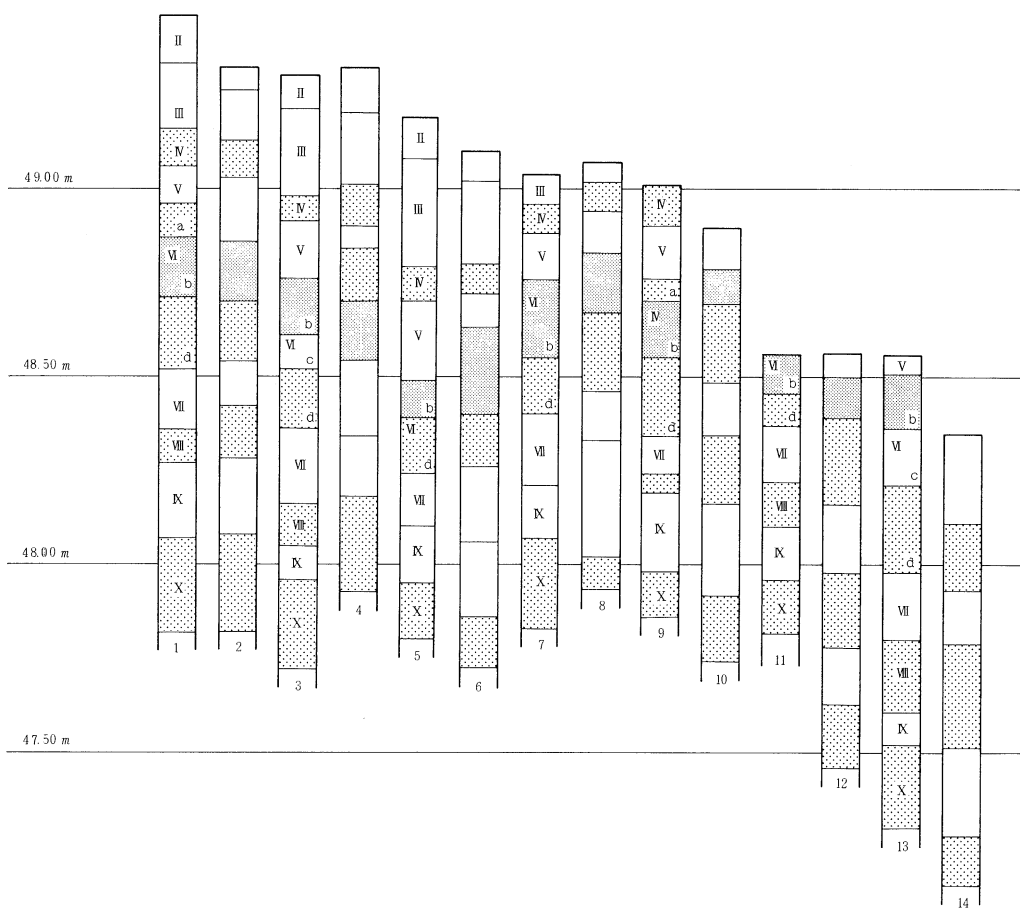
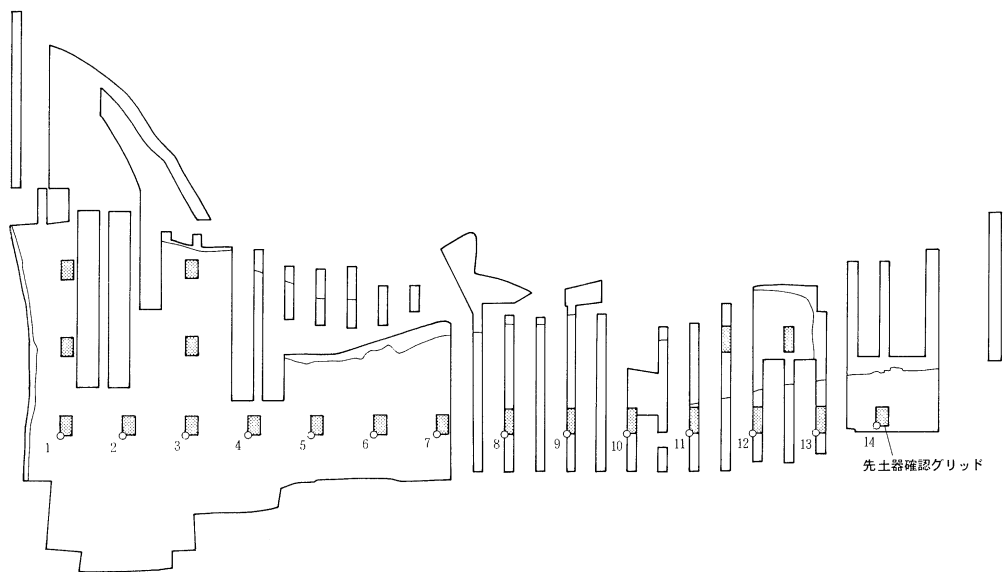


図 6 先土器確認グリッド配置及び遺跡内基本層序図



## VI 遺構と出土遺物

### 1. 遺構の種類と分布 (図5, 図版3・4)

遺構は全部で11基検出された。このうち古墳時代前～中期のものが10基を占め、本遺跡の性格を特徴づけている。

古墳時代の遺構は住居跡と墳墓で、住居跡は、調査区北東部の台地肩部付近に、墳墓群とは隔絶して単独で検出された。住居跡東側の表土中にも遺物の分布がみられることから集落は東側に展開しているものと思われる。

墳墓群は調査区南西部の台地平坦面から肩部にかけて9基が検出されている。内訳は円形周溝墓1, 方形周溝墓7, 甕棺墓1, でこのうち方形周溝墓は大型のもの(1)と小型のもの(6)との二種類に分かれ、さらに小型の方形周溝墓においては形状, 方位などで幾つかの違いがみられ、墳墓群全体としては9基という小数にもかかわらず、バラエティーがある。これらの墳墓群は、南西端部に、円形周溝墓を中心に北側及び北西側に展開する一群と、これより北東側にややなれて位置する大型方形周溝墓とに、分布の上では二つのグループに分かれている。調査区南東側の境界においては、遺構の検出はなく、前者のグループは南西に向かって広がりをもつものと思われる。

検 出 遺 構 一 覧 表

| No. | 性 格   | 規 模 (m) |       |        | 長 軸 方 位   | 備 考       |
|-----|-------|---------|-------|--------|-----------|-----------|
|     |       | 長 軸     | 短 軸   | 面 積    |           |           |
| 1   | 住 居 跡 | —       | 4.60  | —      | N-43.8°-W | (調査No.1)  |
| 2   | 円形周溝墓 | 16.85   | 14.50 | 192.23 | N-73.7°-E | (調査No.2)  |
| 3   | 方形周溝墓 | 16.73   | 15.22 | 242.37 | N-46.0°-W | (調査No.9)  |
| 4   | 方形周溝墓 | 6.04    | 4.89  | 27.78  | N-40.4°-E | (調査No.3)  |
| 5   | 方形周溝墓 | —       | —     | —      | —         | (調査No.4)  |
| 6   | 方形周溝墓 | —       | —     | —      | —         | (調査No.5)  |
| 7   | 方形周溝墓 | 7.52    | 6.43  | 45.78  | N-76.3°-W | (調査No.6)  |
| 8   | 方形周溝墓 | 8.79    | 8.40  | 64.07  | N-50.2°-E | (調査No.8)  |
| 9   | 方形周溝墓 | 11.09   | 10.88 | 105.31 | N-29.2°-W | (調査No.7)  |
| 10  | 甕 棺 墓 | 0.46    | 0.45  | 0.1625 | N-70.2°-E | (調査No.10) |
| 11  | 溝     | —       | —     | —      | —         | (調査No.11) |

その他の遺構としては、溝が一基検出されている。出土遺物がほとんどみられないため確定できないが、覆土の状態から近世以降のものと思われる。

又、後期の縄文土器が数点出土しているが、土師器と混在しており、遺構との関連は追えなかった。

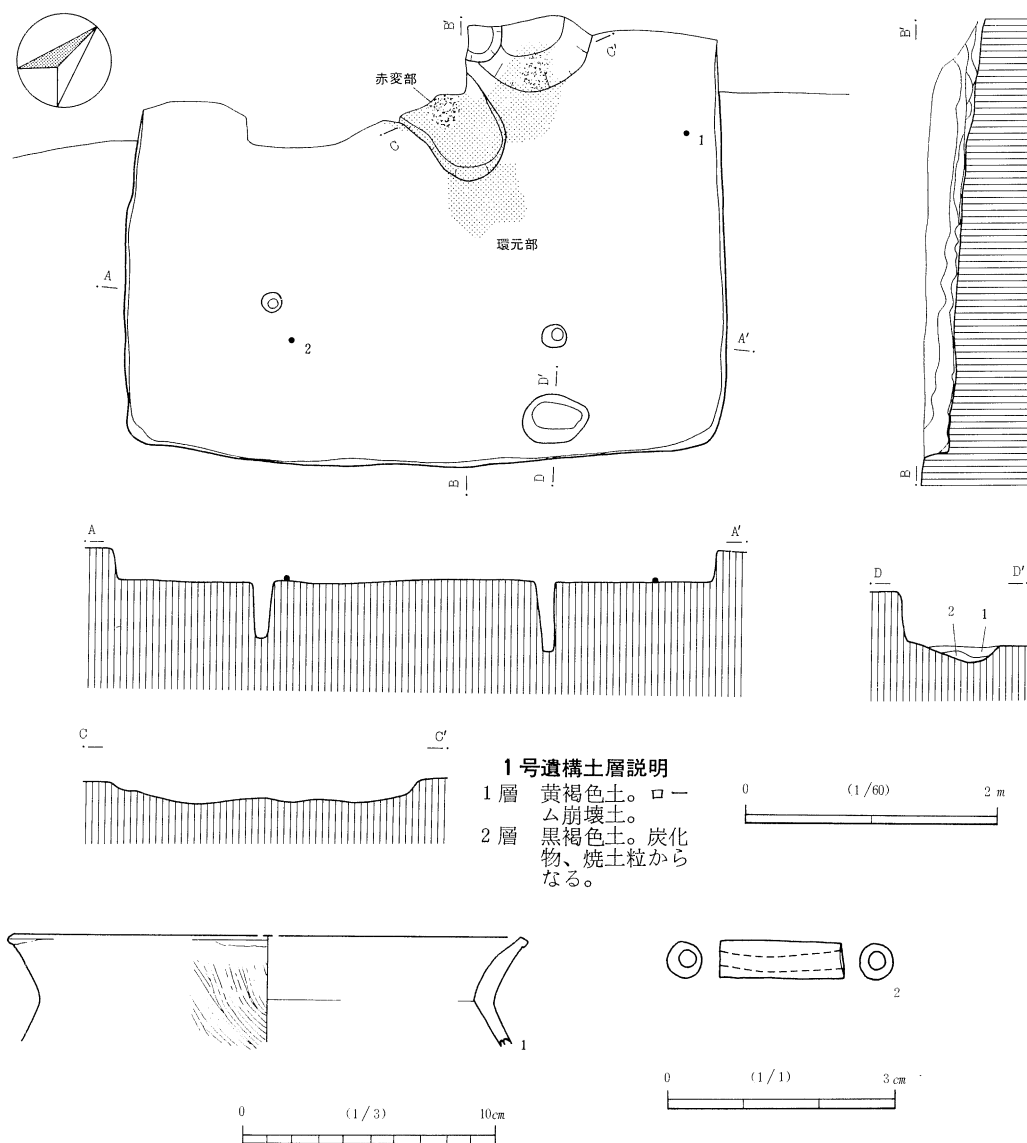


図7 1号遺構及び出土遺物実測図

## 2. 1号遺構（住居跡）（図7，図版5）

今回の調査で唯一検出された住居跡である。調査区の北東側に位置し、付近は南西側からのびる段丘の北東端部にあたり、南から北に向かって緩やかな傾斜をもつ比較的平坦な地点である。遺構は水田の造成時に北西側半分が削られてしまっており、全体のプランは不明であるが、残存コーナーはやや丸味をおび、南西及び北西辺は直線的にのびているが、南東辺はやや内湾している。主軸方位は、 $N-43.8^{\circ}-W$ と推定される。ローム質地山を平均27cm掘り下げて構築されている。床面は、地山削平面をそのまま床とし、北西に緩く傾斜してはいるが、凹凸が少なく全体的に良く踏み固められた良好な面が続いている。柱穴は、東側と南側の2本のみが残存し、前者は径18cm・深さ57cmで、径9cm・高さ7cmの炭化柱が残存しており、後者は径16cm・深さ44cmを測る。貯蔵穴は南東壁下にあり、長径52cm・短径39cm・深さ9cmの不整楕円形を呈する。

炉は、重複して2つが検出されており、土層断面の観察から、北側の炉が新しいものと判断された。

覆土は、炭化物が床面上に3～7cmの厚さで堆積し、その上にローム質土が人為的に埋め戻されている。

出土遺物には土器と管玉がある。土器は、ほとんどのものが細片であり、実測可能なものは1点だけであった。①は床面から出土した甕口縁～頸部の $\frac{1}{4}$ 破片からの実測で、外面は口縁部以下を縦方向のハケメ調整し、口唇部近くのみを横ナデしており、内面は口縁部を横ナデ、胴部をナデ整形している。胎土は0.5～2mm大の砂粒を多く含み、焼成は良好である。茶褐色を呈する。②は、やはり床面から出土した滑石製の管玉である。完形で長さ16.9mm、径4.9mm、孔径2.2mmを測る。

## 3. 2号遺構（円形周溝墓）（図8・9・10，図版6・7・16）

調査区南端部に位置し、ここは南西から北東方向に舌状に突出する台地のほぼ中央部にあたる。10号遺構（甕棺墓）と重複しており、また、付近には4・7・9号遺構などが近接している。

外周のプランは南北につぶれた均整のとれた楕円形を呈し、長軸径16.85m・短軸径14.50m・面積192.23 $\text{m}^2$ を測る。台状部は、径12m程の円形で、周溝は南北方向が狭く、東西方向が広くなっている。

周溝の掘り方は、幅・深さ・形状のいずれの点をとっても全体に不均一で、大きく7つの区間に分けることができる。いずれの部分も外側の立ち上がりより、内側の方が急であるが、北東部はこの傾向が著しく、外側に2段のテラスを作って緩く立ち上がっている。また北側は逆台形状で、内外はほぼ同角度で立ち上がるという特徴を示して。深さは、北西部が最も深く0.68m、

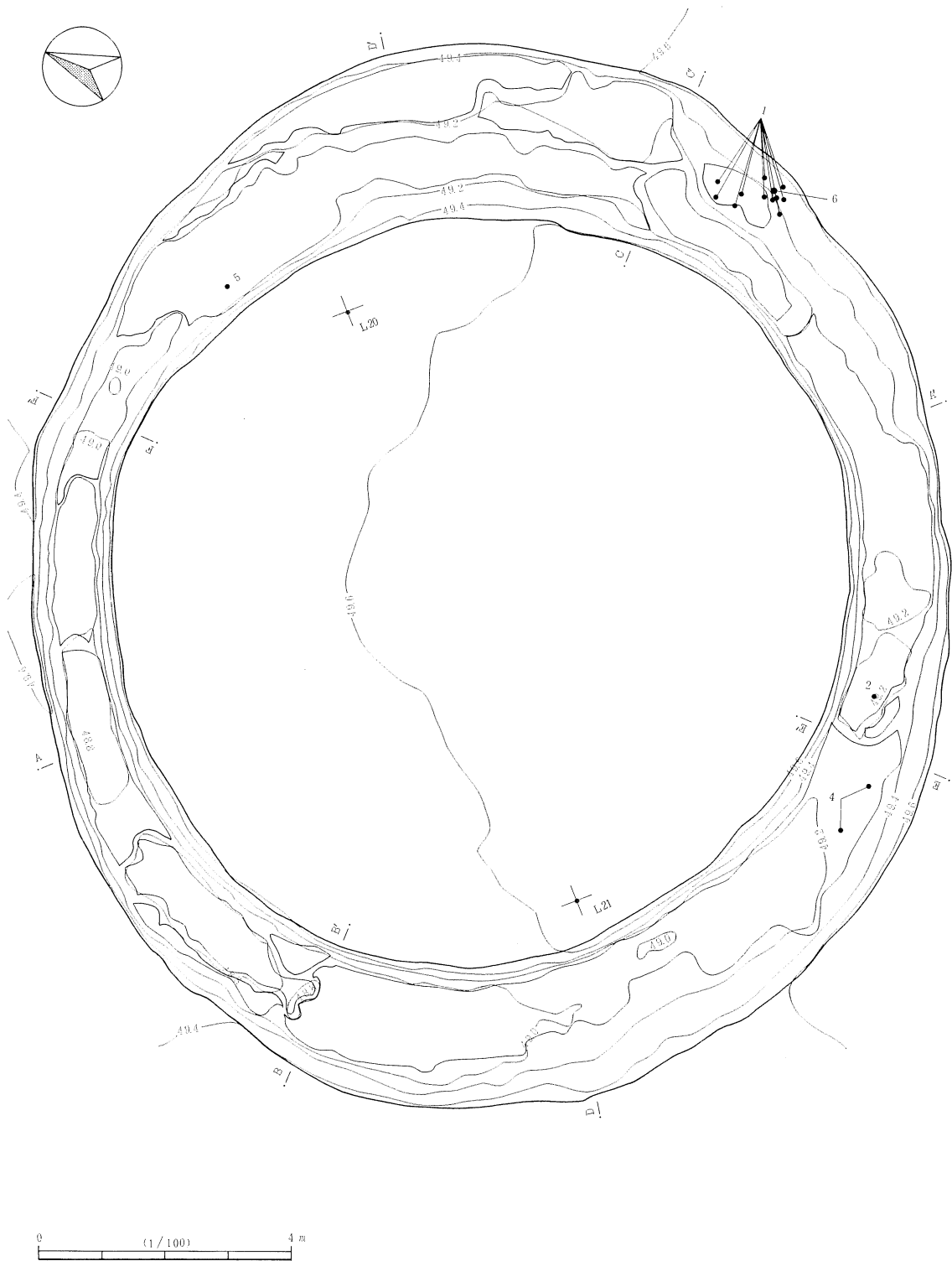


图8 2号遺構実測図(1)

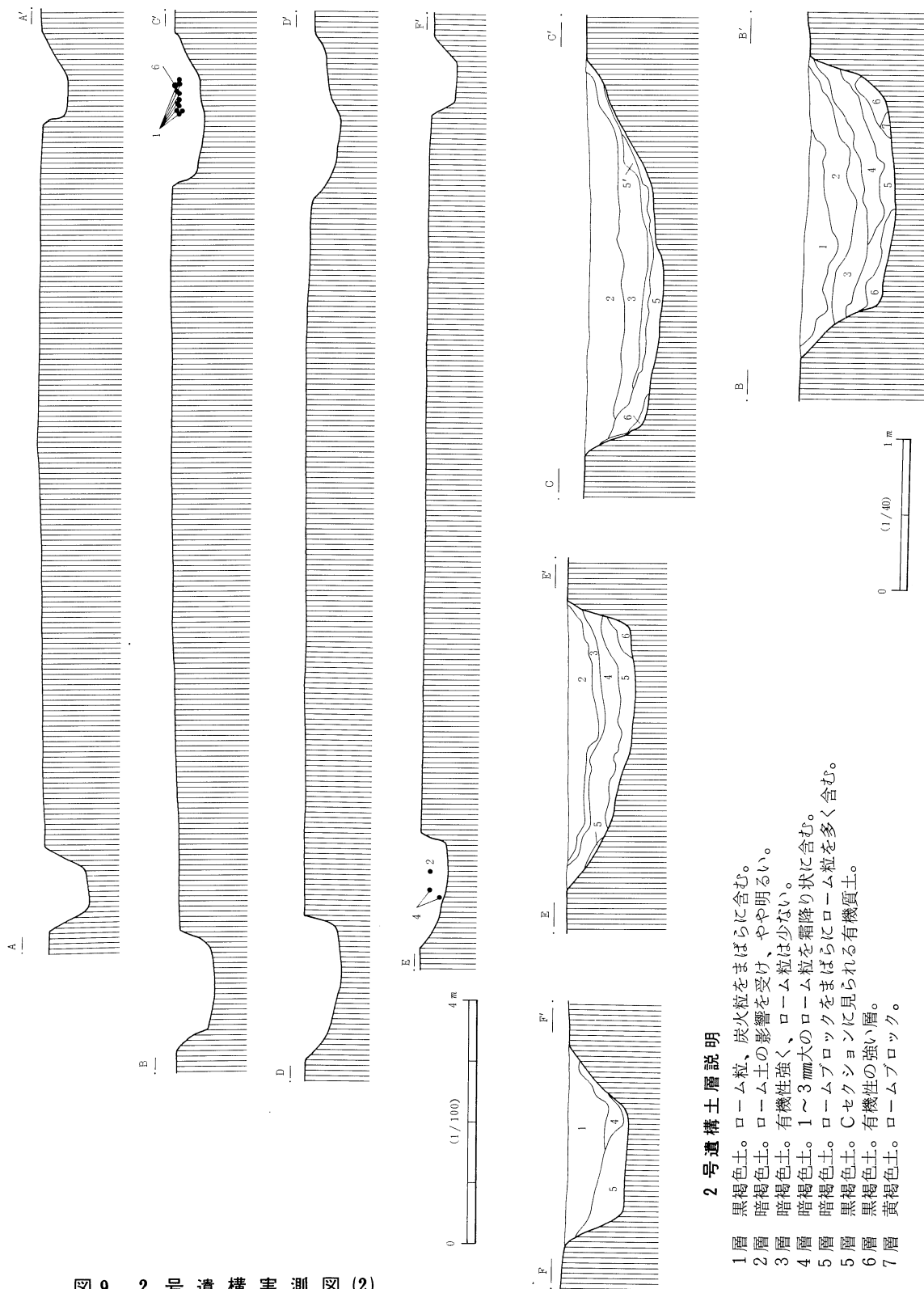


図9 2号遺構実測図(2)

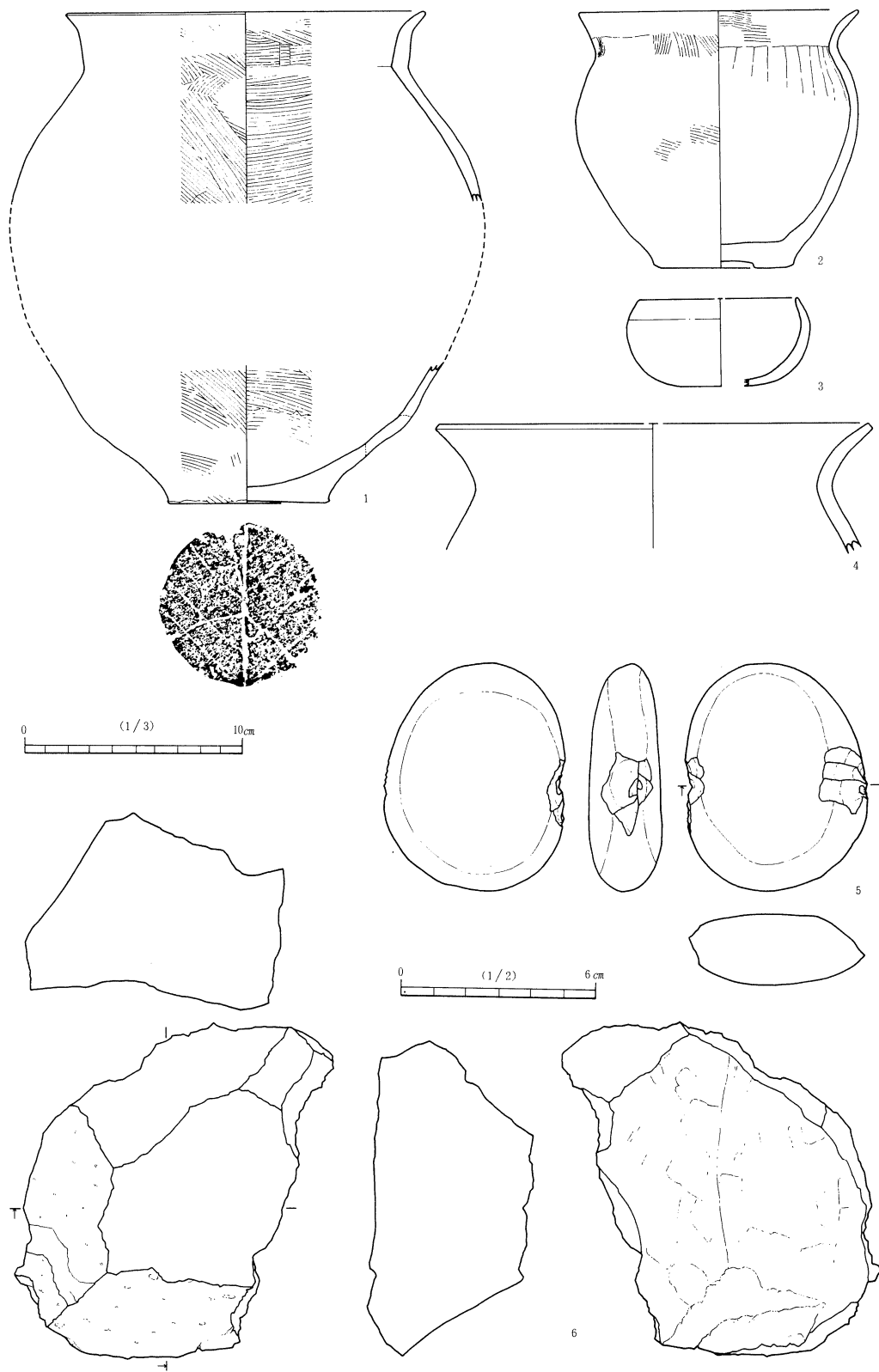


图10 2号遺構遺物実測図

南東部が最も浅く0.42mを測る。地山も南東から北西に向かって傾斜しているため両側底面の比高差は大きく0.3mを測る。一般に地山面が傾斜している場合、高い方をより深く掘り込んで底面のレベルを同じに近づけようとするものであるが、この場合は逆の状態となってしまうている。

覆土は、基本的には、最初期に内側からローム質土が一時に流れ込み、その後は一般的な自然堆積となっている。尚、このローム質土の堆積は南西部で著しく、当初、人為的な埋め戻し土と誤認する程であった。

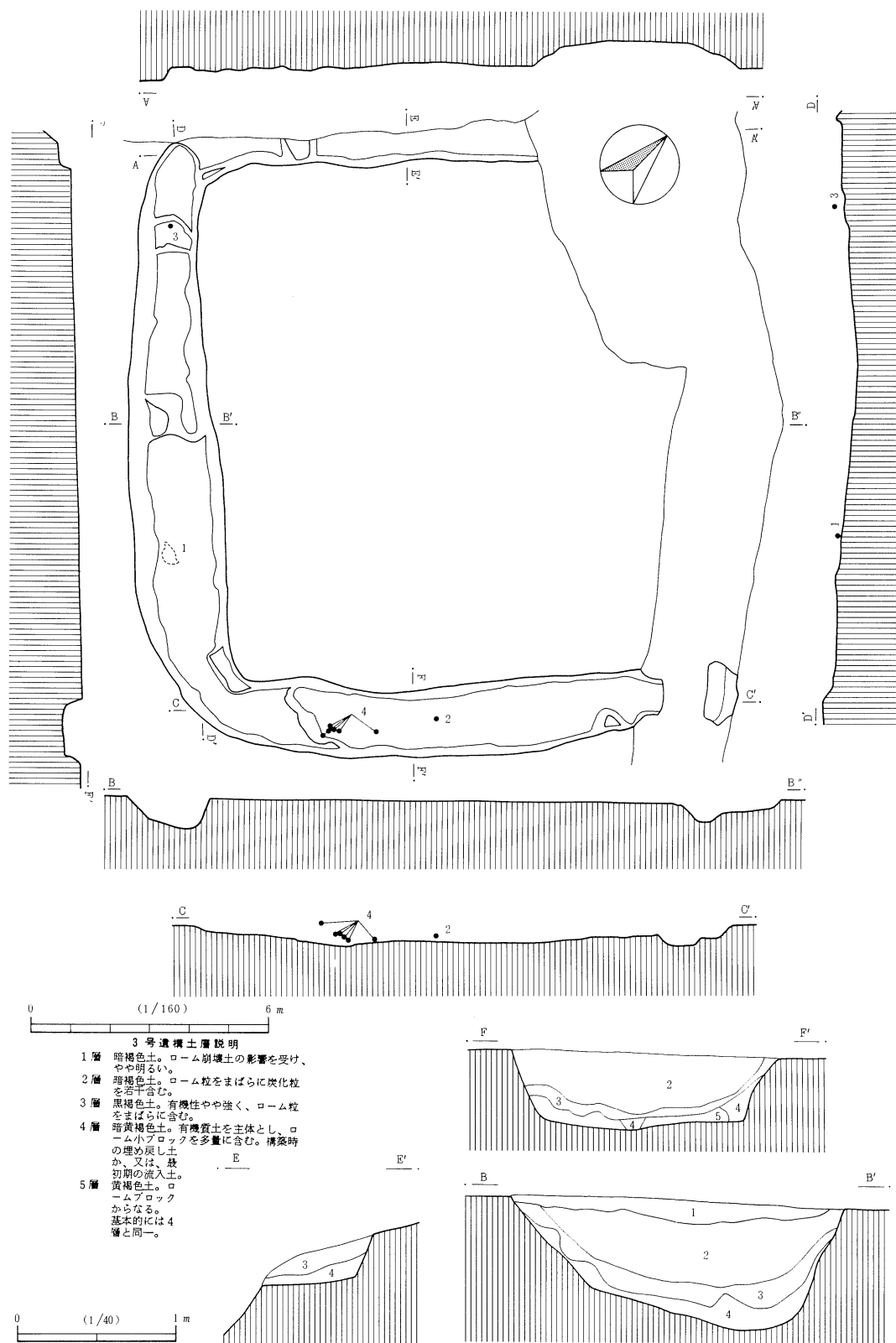
出土遺物は全体に少なく、土器4点と石器2点が実測された。①の甕は、周溝がかなり埋まった時期に外側から投げ込まれている。47の細片に分かれて出土しており、この中央部に6の石器が同レベルで出土している。口縁部 $\frac{1}{3}$ 、胴部 $\frac{1}{3}$ 、底部完存からの実測。内外面ともハケメ調整を

丁寧に行い、口縁上部のみ横ナデを行なっている。胎土は0.5～2mm大の砂粒を多く含み、本遺跡中の土器の内では不良である。焼成は良好で、色調は淡褐色～淡茶褐色を呈する。②の小型甕は、覆土中位から出土しており、集中的に出土した17点の破片が接合され、本遺構で唯一完形に近くなったものである。外面は口縁部を横ナデ後胴部をハケメ調整し、その後、ナデを行なっている。内面は、口縁部をハケメ調整後ナデ、胴部上半をヘラ削り後ナデている。胎土は0.5～1mm大の砂粒を多く含み、焼成は良好。淡褐色を呈し、内外面の一部に炭化物の付着がみられる。③は覆土中から出土した2つの破片が接合した杯で、約 $\frac{1}{2}$ 破片からの復元である。表面は粉状に剝落し、整形痕は不明瞭である。胎土は砂粒をほとんど含んでいない。焼成は極めてあまい。淡茶褐色を呈し、一部に赤彩が残っている。④の甕は覆土中位に外側から投げ込まれたように出土しており、13点の破片が接合した。口縁部付近 $\frac{1}{4}$ からの実測で、内外面ともナデによってきれいに整形されている。胎土は砂粒をほとんど含んでおらず、焼成は良好である。暗茶褐色を呈する。⑤は、石錘で底面に密着して出土しているものの、時期は不明確。⑥は用途不明の石器で、磨耗している部分と、敲かれて整形された面がある。1の土器片群の中から出土している。

#### 4. 3号遺構（方形周溝墓）（図11・12、図版8・9・16）

調査区南東部やや中央寄りに位置し、台地肩部付近に位置する。地山は南から北に傾斜しているが、台地中央寄りの付近はほとんど平坦である。11号遺構の溝によって北東側を、大正時代の水田化によって北西溝の半分を削られている。この11号遺構は本遺構の北東溝の位置と重なっているが、11号の確認面、壁面、底面などには北東溝の存在を確認できる痕は全くみられなかった。11号遺構によって北東溝が完全に破壊されてしまった可能性もなくはないが、その場合、北東溝は他の方向の溝とは形状・深さを異にしなければならない。

外周プランは隅丸方形を呈し、全体にやや丸味をおび、台状部はコーナーが角ばった正方形を





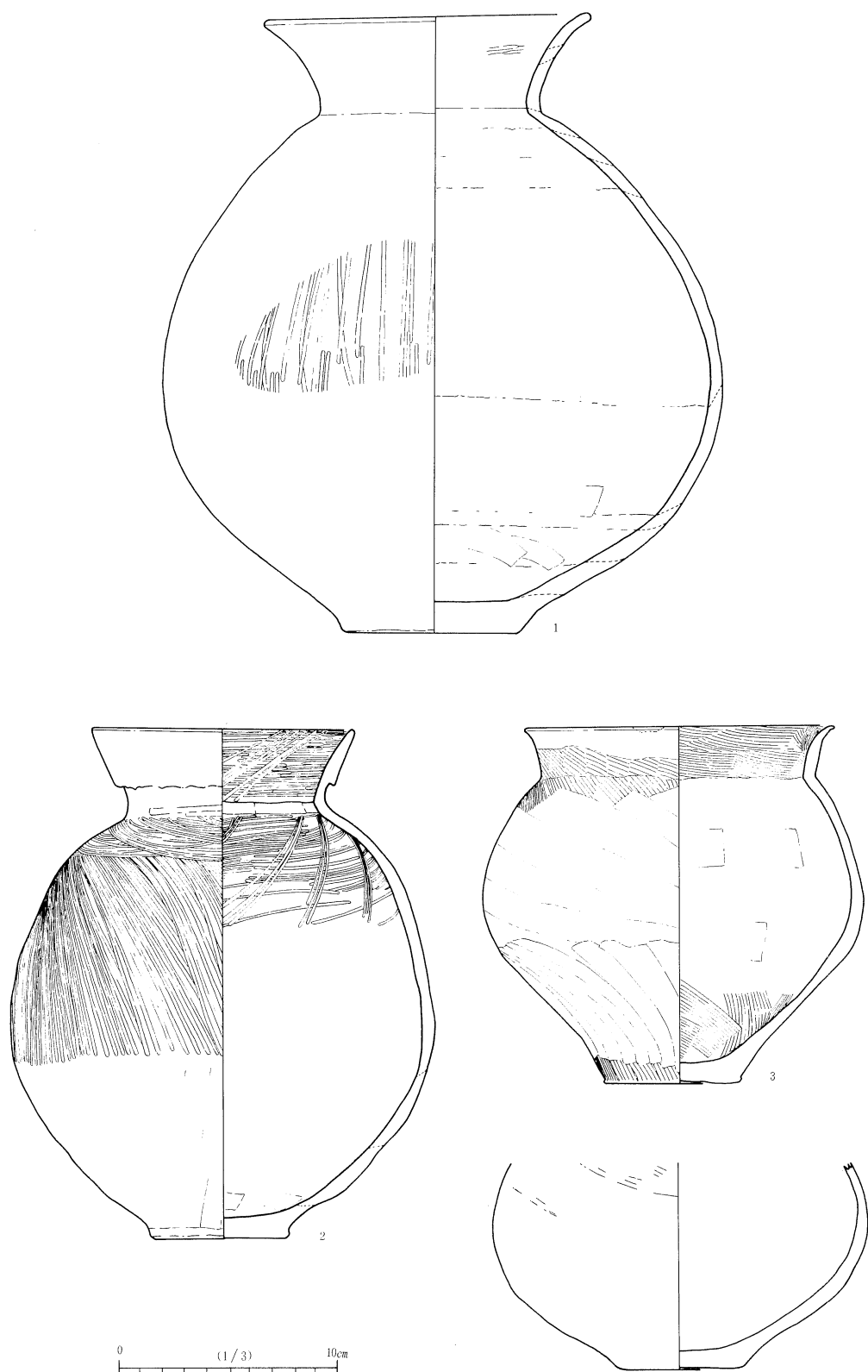


図12 3号遺構及び出土遺物実測図

呈している。規模は他の方形周溝墓に比べ著しく大型のものである。周溝の掘り方は、コーナー付近が浅く、中央に向かって深くなる傾向を示し、北西辺西コーナー寄りに一部高くなる部分があるが、これは特定の施設というよりも掘りの荒さと思われる。壁は内側が急で外側に緩やかに立ち上がっている。北西溝に比べ南東溝は深く掘られており、高さを整えようとした意図がうかがえる。

覆土は、ローム質土が底面から壁面にかけて流れ込んだ後、有機質土系の土が堆積している。

出土遺物は、土器が5点ある。①は完形の壺で、南西溝の底部に細片につぶれて出土した。焼成があまりいいが、輪積の境や表と裏で分解してしまい、復元に困難を伴った。内外面とも表面が粉状に剥落し整形痕は不鮮明であるが、外面は口縁部及び頸部付近が横位に、胴部が縦位にミガキが行なわれている。内面は口縁部が横位のミガキが行なわれ、以下がナデられている。胎土は細砂粒を多く含み赤色の粒子を混じえている。焼成は不良。淡茶褐色を呈する。極めて丁寧な作りである。②は完形の壺で、南東溝の底部よりやや浮いて横転した状態で出土した。外面は口縁部横ナデ、頸部ヘラ削り後横ナデ、胴肩部横位のミガキ、胴部上半縦位のミガキ、同下半ヘラ削り後ナデが行なわれ、内面は口縁部横位のミガキ、頸部ヘラ削り、胴肩付近ミガキ、胴下部ナデが行なわれている。胎土は白色細砂粒を若干含み焼成は良好である。色調は淡黄褐色。これも丁寧な作りである。③は完形の小型甕で、北西溝の覆土中から完形で出土した。外面はハケメ調整後口縁部上半を横ナデし、胴部に2段のヘラ削りを行なっている。内面は口縁部、底部付近をハケメ調整し、胴部上半をヘラ削りしている。胎土は細砂粒を若干含み、焼成は良好である。淡黄褐色を呈し、胴部下半及び口唇の一部にスス状のものが付着する。④の壺は、南東溝覆土上位～底面にかけて出土したもので、外側から投げ込まれたものであろう。底部～胴部 $\frac{1}{3}$ からの実測。外面はハケメ調整をナデできれいに消しており、内面はナデを行なっている。胎土は0.5mm大の砂粒を多く、赤色粒を若干含む。焼成は良好。淡黄褐色を呈する。11点の破片が接合した。

#### 5. 4号遺構（方形周溝墓）（図13、図版10・17）

調査区の南西側、台地が西側にやや広がる部分に位置する。この付近から西方向への傾斜は強くなる。南東溝は欠いており、本遺跡中明らかにこの形式をとるものは本遺構のみである。北及び西コーナー付近は浅くなっており、本来、連結していたものと思われる。これに対して、北東溝の南東端部及び、南西溝の南東端部は深いままで終わっており、南東側に溝が作られていないことを示している。溝が細いのになら、掘りは深く、壁の立ち上がりも比較的しっかりしている。

覆土はローム質土の流れ込みはなく、底面から有機質土系の土が自然堆積をしている。

出土遺物は、土器が1点のみである。南東溝中の覆土より出土した埴で、完形である。外面は

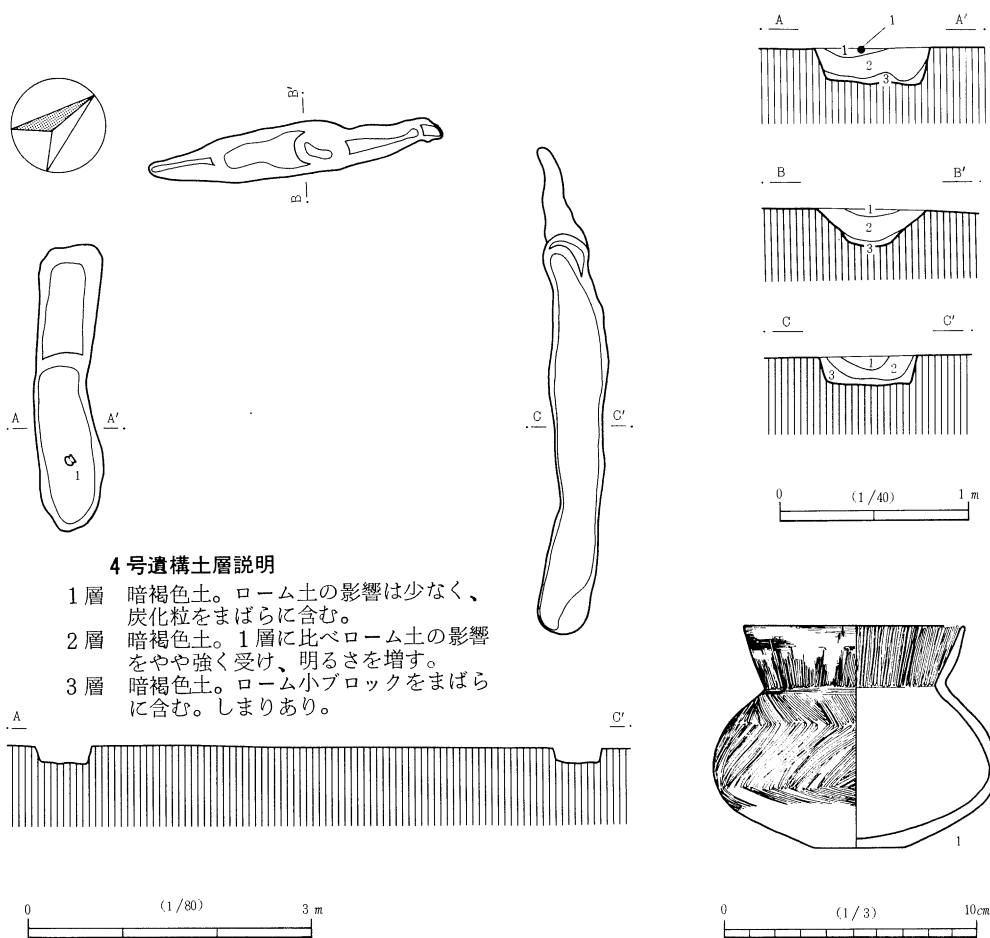


図13 4号遺構及び出土遺物実測図

体部下半を除いてミガキが行なわれており、口縁部は横位と縦位の2段に、体部上半は斜位に3段になされている。内面は口縁部のみ縦位のミガキが入り、以下はナデられている。胎土は細砂粒を多く含むが良好のもので、焼成も良い。色は淡赤褐色を呈し、外面全体と内面の口縁部に赤彩が施されている。

#### 6. 5号遺構（方形周溝墓）（図14，図版11）

調査区の南西側，5号遺構の北西側に並ぶように検出された。半分以上が調査範囲外に在り，また，掘り込みが浅いことから，全体の規模，方位は不明確であるが，北東溝の北西端部は，コーナーのようにやや曲がっており，一辺の長さは推察できる。掘り方を見ると，土擴をつなぎ合わせたようにつくられており，一つ一つの単位によって底面の高さが違っている。このため，平面形においても凹凸が著しく，極めて荒い造りである。北辺中央のとぎれは底面の高低によるもので，本来はつながっていたものと思われる。

覆土は有機質土系の土が底面から堆積している。

出土遺物は細片のみで実測可能なものはなかった。

#### 7. 6号遺構（方形周溝墓）（図14，図版11）

調査区の南西端，5号遺構よりやや離れて検出された。浅い一本の溝として確認されており，北側に掘り込みが全く見られないことから，遺構は調査区域外の南側に広がっているものと思われる。ただ，この場合でも東溝はないものと思われ，4号遺構と同様コの字状を呈する可能性がある。5号遺構と同様，荒いつくりで底面には段を有し，平面形も直線的でない。

覆土は，下層にローム質土の流れ込みを薄く堆積し，上部に有機質土系の土が自然堆積している。

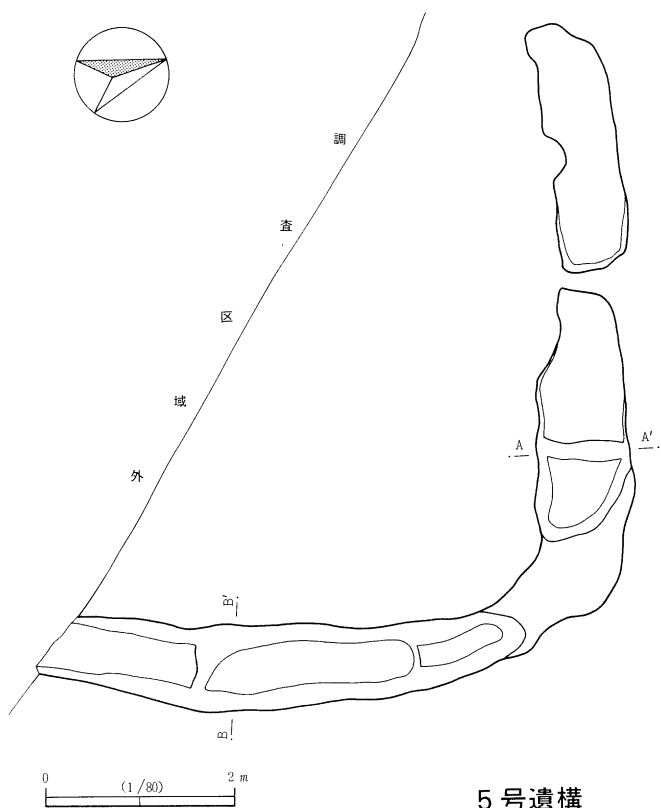
出土遺物は細片のみで実測可能なものはなかった。

#### 8. 7号遺構（方形周溝墓）（図15，図版12）

調査区南側，2号及び9号の間に挟まれるように検出された。地山は北西に向かって若干傾斜するが，ほとんど水平に近い。プランは，南東コーナーを欠き，北東コーナーがやや丸味をおびるものの全体として整った長方形を呈する。また，掘り方は，他の方形周溝墓に比べ整っており，底面は若干の凹凸はあるものの，比較的平坦で平面形においても直線的な溝となっている。北辺が最も深く，全体としては，とぎれている南東コーナーに向かって浅くなる傾向にある。

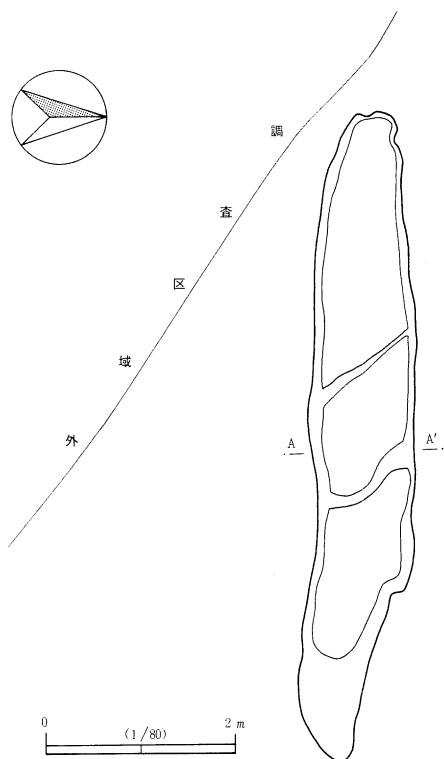
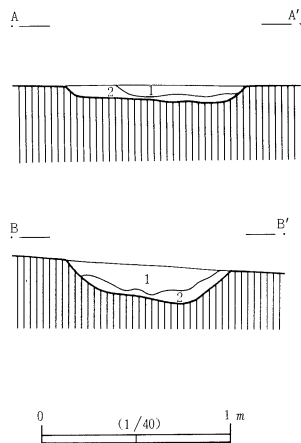
本遺構のプランは長方形を呈しており，他の方形周溝墓と比べ特異である。これは隣接する2・9・8号との配置を考える時，これらの遺構に強く規制された結果と理解できる。また，南辺と東辺とを延長して想定できる南東コーナーは，有機質地山の存在を考えると2号遺構と重複してしまい，この部分をとぎれさせているということは，2号遺構の存在を強く意識していると言えよう。

覆土は，底部から有機質土系の暗褐色土が自然堆積している。



#### 5号遺構土層説明

- 1層 暗灰褐色土。ローム小ブロックを若干含む。
- 2層 暗褐色土。ローム小ブロックを多目に含む。



#### 6号遺構土層説明

- 1層 暗褐色土。ローム粒を霜降状に、炭化粒を若干含む。
- 2層 褐色土。暗褐色土中にロームブロック、ローム粒を多く含む。しまりあり。

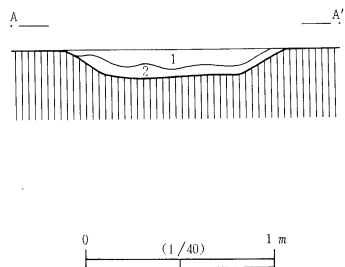


図14 5号及び6号遺構実測図

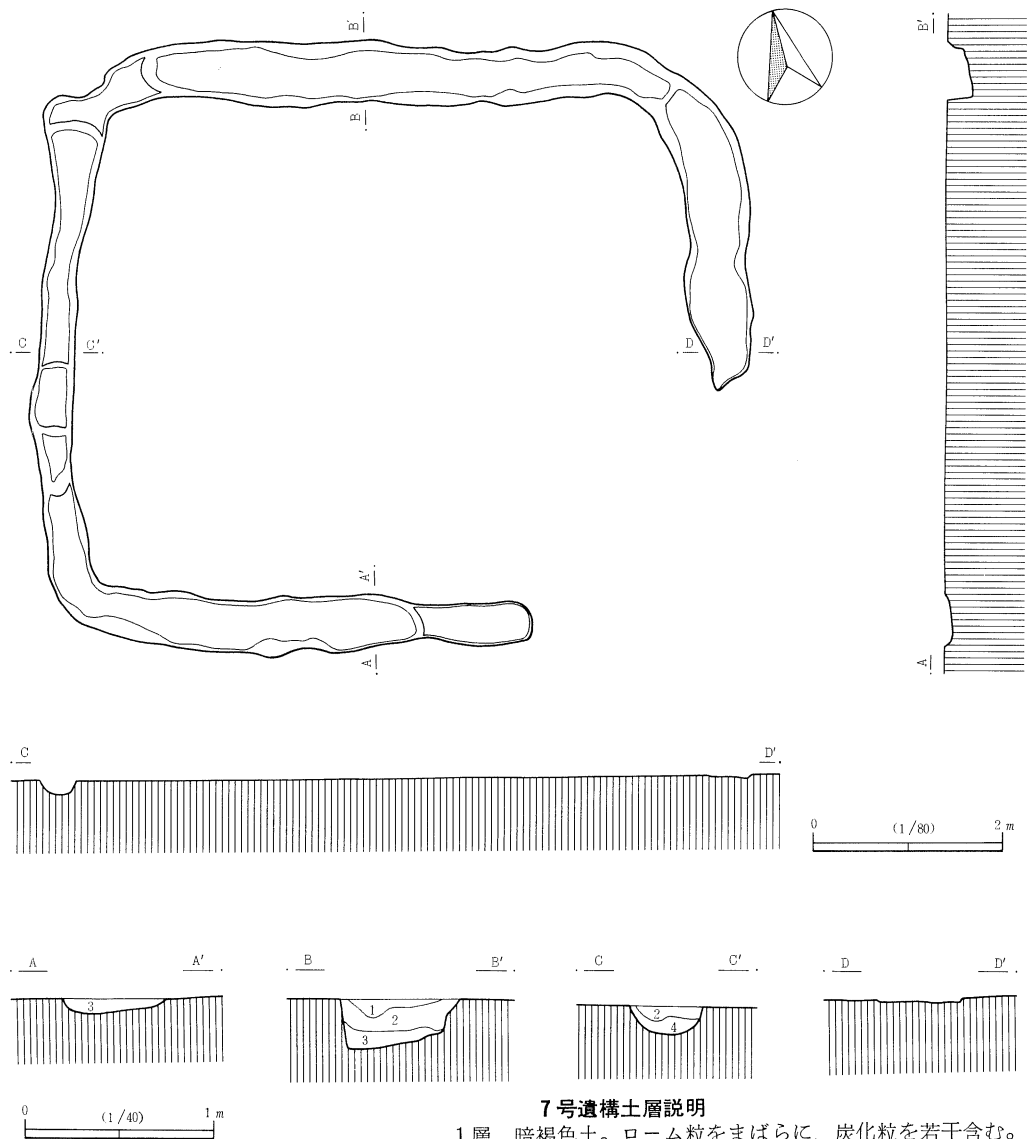


図15 7号遺構実測図

出土遺物は、細片のみで実測可能なものはなかった。

## 9. 8号遺構（方形周溝墓）（図16，図版12）

調査区南側，9号遺構の南東側に互いのコーナーを接するように検出された。地山は南から北に向かってわずかに傾斜しているが，ほとんど水平に近い。プランは隅丸方形であるがコーナーの丸味はかなり強く，4ヶ所がとぎれている。このうち東コーナー付近の2ヶ所は掘りの浅さに

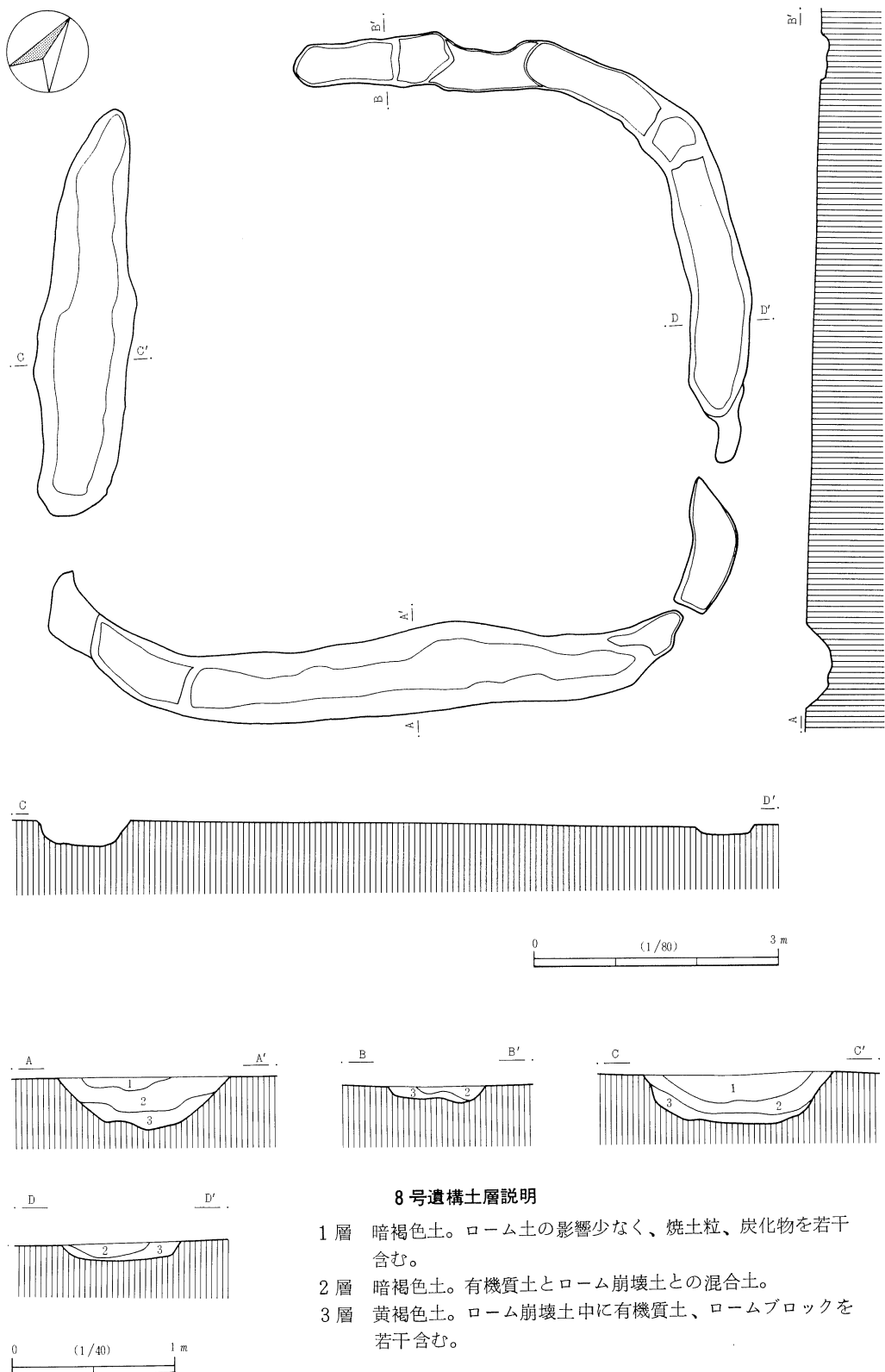


図16 8号遺構実測図

よるものであるが、他の2ヶ所は、一方の溝がしだいに浅くなるのに対しそれぞれ南西溝の端部が急傾斜で立ち上がっていることから、当初から切れていた可能性もある。平面形及び底面は凹凸が著しく、掘り方の単位が整形されずに残されている。

覆土は、底部付近に12cmの厚さでローム質土が流れ込み、その後有機質土が自然堆積している。出土遺物は細片のみで実測可能なものはなかった。

#### 10. 9号遺構（方形周溝墓）（図17、図版13）

調査区南側、前述した7・8号遺構の北側に隣接する。地山は南東から北西に向かって比較的強く傾斜している。残存プランは、隅丸正方形を呈する。北東・北西コーナーがとぎれているが、それぞれのコーナーを挟む溝の端部はしだいに浅くなっており、本来、連結していたものと思われる。掘り方は荒く底面には段差が多いが、平面形は比較的整った溝が廻っている。

覆土は底部にローム質土系が薄く流れ込んでいるが、これより上は有機質土系の自然堆積土である。

出土遺物は細片だけで、実測可能なものはない。

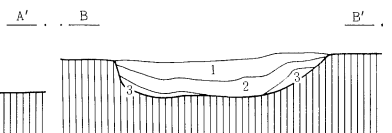
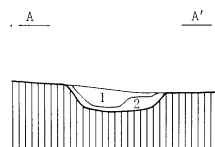
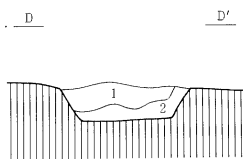
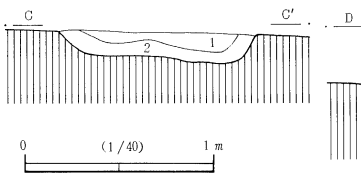
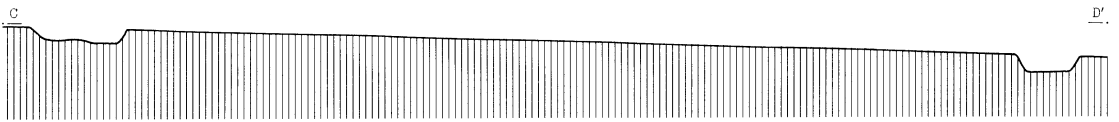
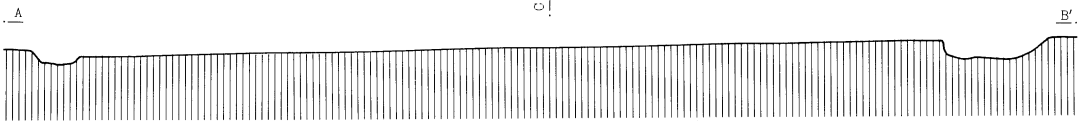
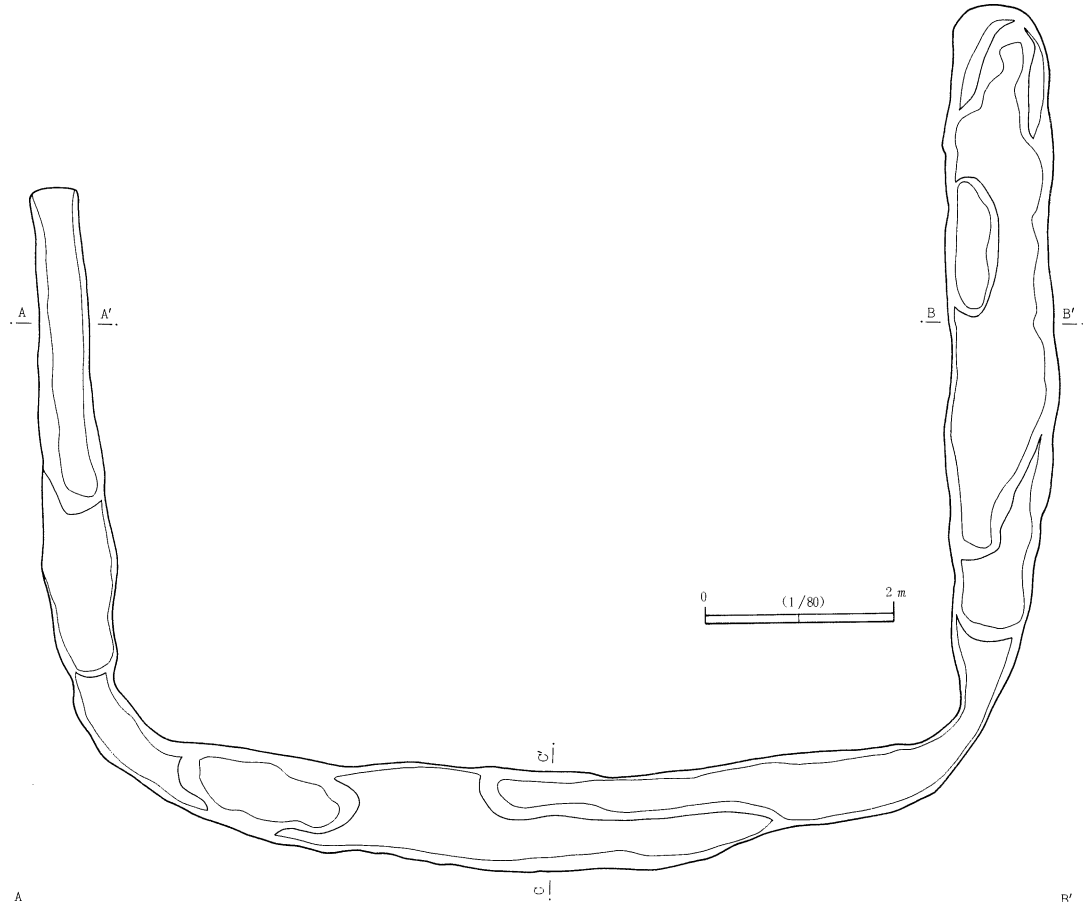
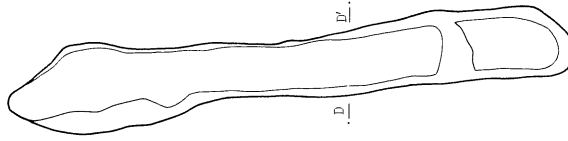
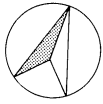
#### 11. 10号遺構（甕棺墓）（図18、図版14・17）

調査区の南側、2号遺構の北側にこれを切って検出された本遺跡唯一の甕棺墓。本遺構の構造は特異であり、径45cm程の円形、擂鉢状の小ピットの底に甕の底部～胴下半部破片（2）を正位に置き、その上に頸部以上を欠いた甕（1）を逆位にかぶせている。また上にかぶせられた甕の胴下半には人為的にあけられた孔が一つあり、1の甕の小破片で、外からふさがれていた。中は中空になっており、下部にたまった土を水洗いによって精査したが、骨その他の遺物は発見されなかった。

覆土は、ローム質土を主体とする人為的埋め戻し土である。

出土遺物は土器が2点ある。①は上位の甕で頸部以上を欠失している。極めて丁寧な作りで内外面を長息のハケメ整形を行ない上位はその後ナデを行なっている。内面上位には2段の輪積が未整形のまま残されているが、下段の輪積痕においては接合部に横位のハケメが施され、これが上に積まれた帯の下に入り込んでいる様子が観察された。このことから、内面のハケメ調整はこの段階で行なわれている可能性が考えられる。胴下半の孔は外側から開けられ、内側は面取り状に剝離している。胎土は0.5～1mm大の砂粒をまばらに含むも良好で、焼成も堅く良好である。色調は、内外面淡茶褐色を呈する。②は下位の甕で、底部～胴下半部のみを残す。外面はハケメ調整後一部をナデている。胎土は細砂粒を多く含む良好。焼成良好。色調は淡白褐色を呈する。

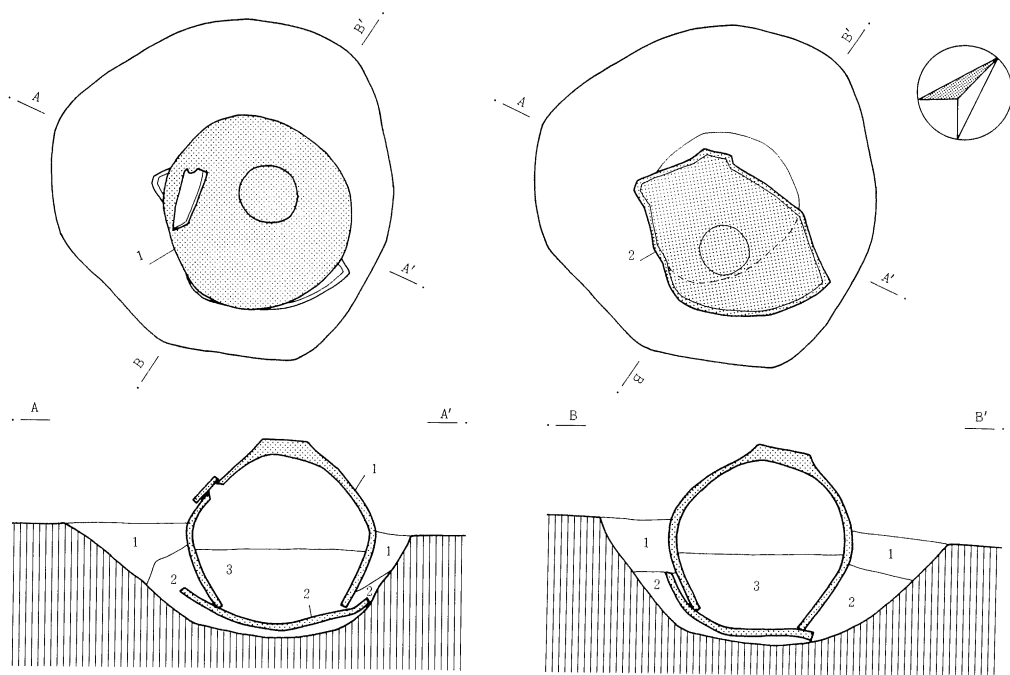




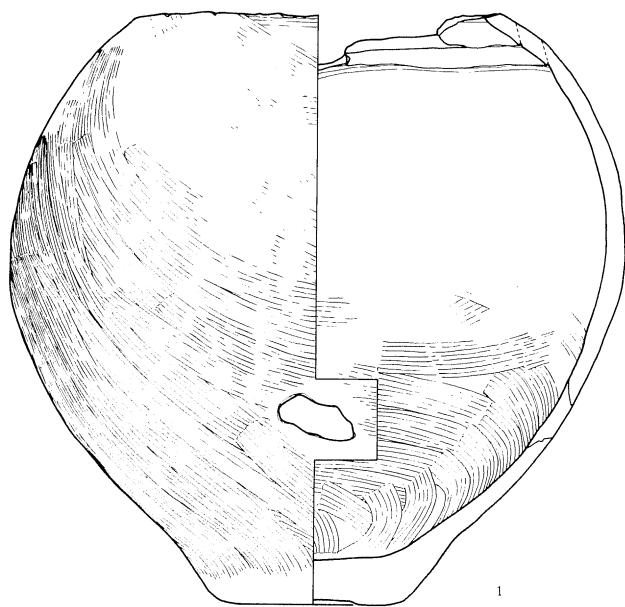
9号遺構土層説明

- 1層 暗褐色土。ローム粒を若干含む。
- 2層 暗褐色土。ローム崩壊土、ローム小ブロックをまばらに含む。
- 3層 黄褐色土。ローム崩壊土。

図17 9号遺構実測図

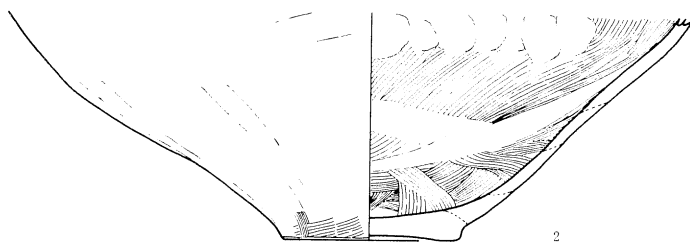


0 (1/10) 30cm



#### 10号遺構土層説明

- 1層 暗褐色土。ローム崩壊土を混じえる。
- 2層 暗茶褐色土。ローム崩壊土を主体とする。
- 3層 暗褐色土。



0 (1/3) 10cm

図18 10号遺構及び出土遺物実測図

## 12. 11号遺構（溝）（図19，図版15・17）

調査区中央南西寄りに位置し、3号遺構を大きく切って作られている。プランは複雑であるが、基本的には中央を直線的に通っている幅狭で深い溝と、これより幅広で浅く北西部で屈曲している外側の溝との2つが重複しているものである。土層の断面観察から前者が古く、これが中位まで埋没した時に拡張を行ない、後者が作られていることが判った。前者は、幅約1.2m・深さ約0.45mを測り、底面は平坦で全体的にしっかりした掘り込みである。後者は北西に伸びている溝がやや西側に向かって折れ曲がっており、屈曲部から北西側はしだいに幅広になっている。幅は南東端部で2.1m、北西端部で5.3mを測る。深さは南東側では0.15mと浅いが、折れ曲がってから段状に深くなり北西端部で最大0.9mとなる。また、この段差の部分は、さらに新しく掘り込まれたものであろう。

本遺構は、良好な遺物がなく時期は不確定である。しかし、溝の走向が現在の水田の区画と一致していることや覆土の在り方から比較的新しい時期のものと思われる。また、その性格については、道路と水路の二つが考えられるが両者とも根拠がなく、不明である。

覆土は、他の古墳時代のものに比べ、黒味が強く、新しさを感じさせており、しまりもない。

出土遺物は多くが細片で高杯の脚部一点のみが実測された。外面はヘラミガキによって、内面は上部ヘラ削り、下部ハケメ調整が行なわれている。胎土は砂粒少なく赤色粒を多く含み、焼成は良好である。明褐色を呈す。

## 13. 遺構外出土遺物（図20・21．図版17）

遺構外の表土中から出土した遺物は、土師器852点、石器3点、縄文式土器49点である。出土地点はほぼ3点に限られており、8Jグリッド付近（土師器253点、石器2点）、9Iグリッド付近（土師器60点、縄文式土器48点）、20Fグリッド付近（土師器531点、縄文式土器1点）に集中し、それぞれ調査範囲を拡張している。このうち20F拡張区の土師器群は総て表土中のものであり、近年の土器捨て場になっていたようである。

### （1）土師器

実測可能なものは3点のみであった。①は甕の口縁～胴上部の破片⅓からの復元である。内外面ともに表面が粉状に剝離し整形痕の観察はできない。本遺跡出土の他の甕に比べ器厚が薄く、口唇部は著しく脆弱である。胎土は0.5～1mm大の砂粒を多く含む。焼成は良好。淡明橙色を呈す。20F拡張区、表土出土。②は、高杯の脚部で、三つの孔を有する。表面の剝落が著しいが、外面はミガキが施されているようである。内外面とも赤彩の痕が見られる、8J区拡張区、表土出土。

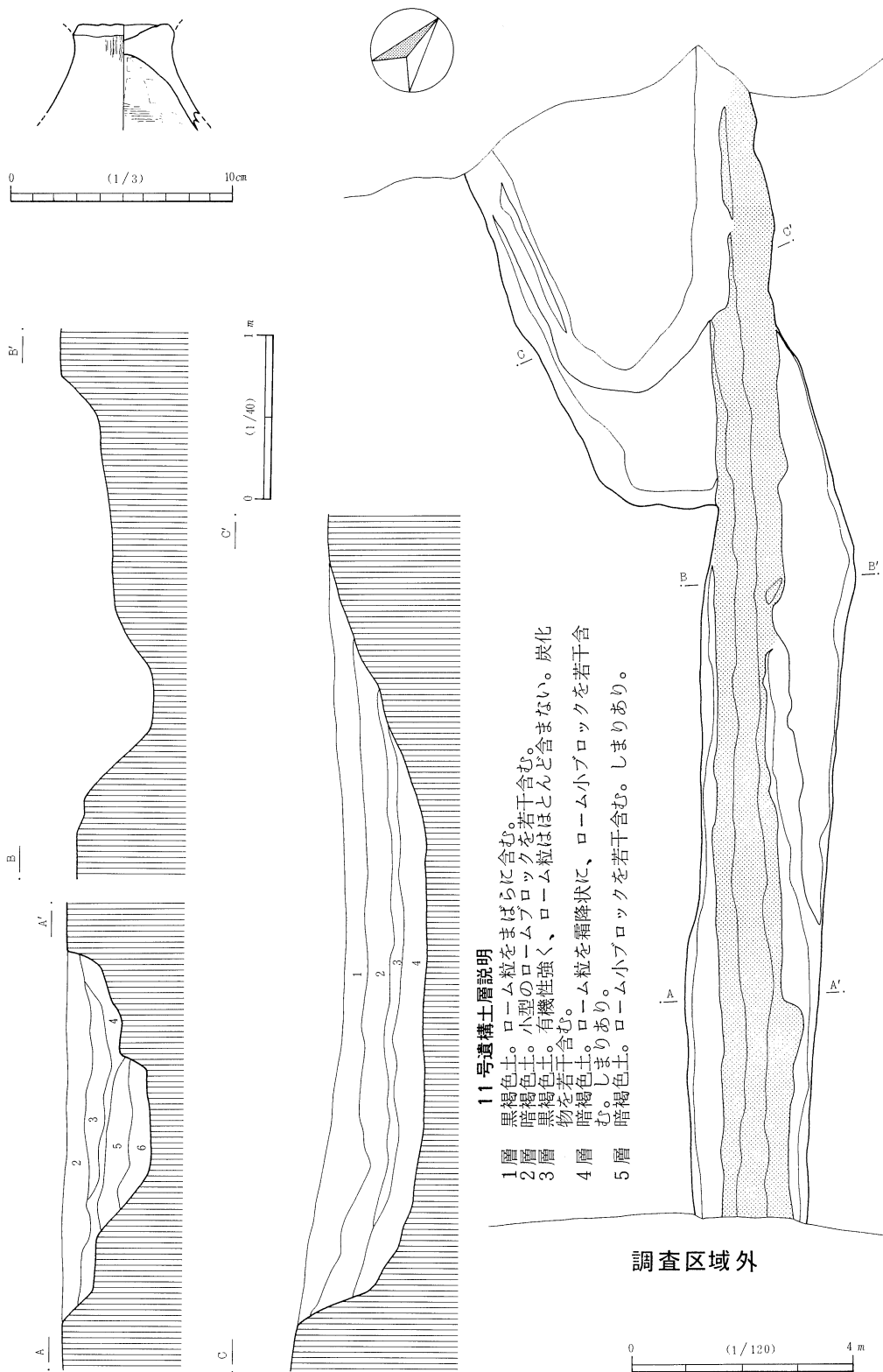


図19 11号遺構及び出土遺物実測図

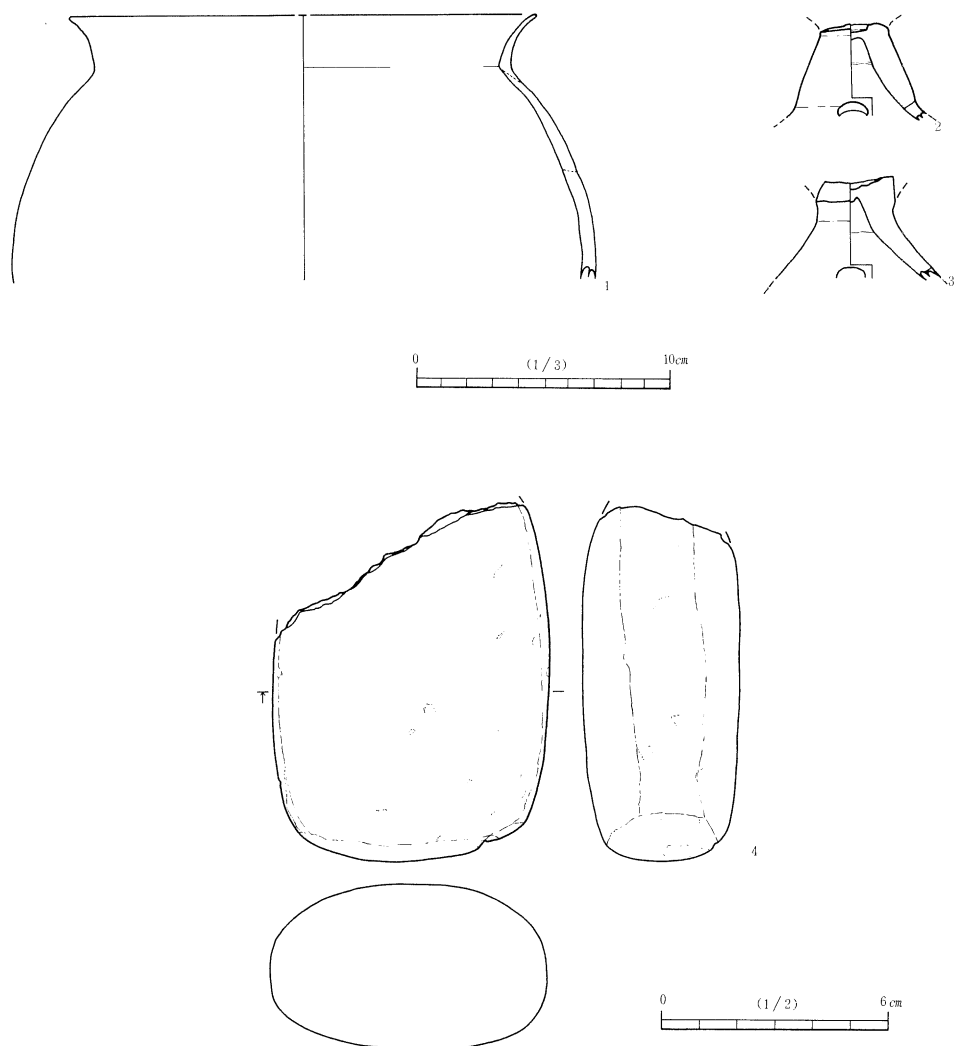


図20 遺構外出土遺物実測図

③も高杯の脚部のみで、孔の一部が確認できるが、数は不明である。内外面とも剝離が著しく整型痕を残していない。胎土は、0.5mm大の黒色粒をまばらに含んでいる。焼成不良。色調は、外面淡橙色、内面灰褐色を呈する。20F拡張区、表土出土。

## (2) 石器

実測可能なものは1点だけである。④は磨石で先端部は敲かれている可能性もある。表採。

## (3) 縄文式土器

8点の拓本を掲げた。いずれも縄文時代後期中葉（加曾利B式）のものである。尚、縄文時代後期前葉の土器細片が数点出土している。

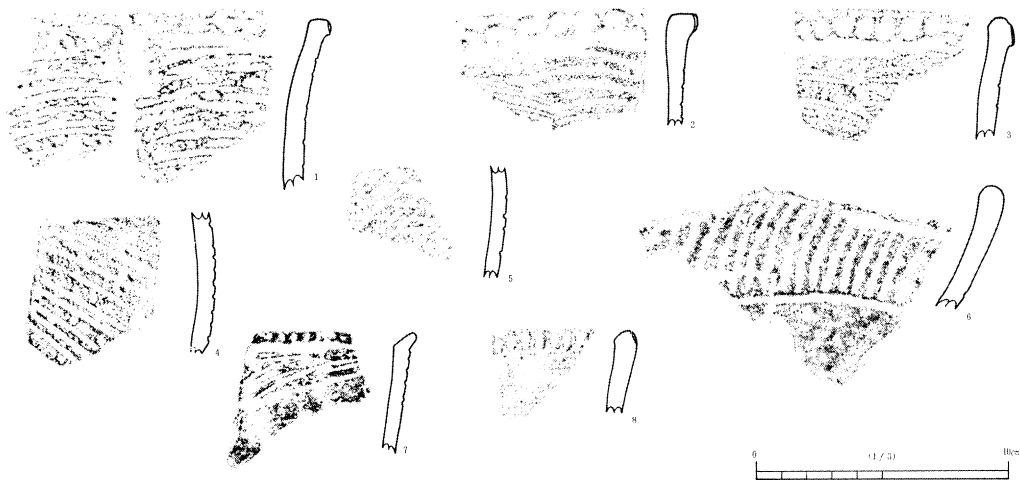


图21 遺構外出土遺物拓影図

## VII ま と め

本章では、皿郷田茂遺跡の主体的時期となっている古墳時代前半の墳墓群及び集落について、若干のまとめを行いたい。ただ、今回の調査は遺跡の一部であり、出土遺物も少なく、不十分なものとなってしまった。

### 土器について

実測可能であった土器は16点のみで、内訳は、甕（小型甕も含む）8、壺3、埴1、杯1、高杯3である。概期の遺構5基から12点が出土しており（1号－1点、2号－4点、3号－4点、4号－1点、10号－2点）、残りの4点は近世以降と思われる溝の覆土中と表土からの出土である。

これらの土器は総て古墳時代前半のものとして捉えられるが、各器種ともに新旧の特徴を見出すことができる。この新旧の特徴とはいわゆる「和泉式」・「五領式」として理解されるもので、新しい特徴を示している土器としては、2号－1、2号－3、3号－2、3号－3、4号－1、遺構外－1があり古い特徴のものとしては、1号－1、2号－2、2号－4、3号－1、11号－1、遺構外－2、遺構外－3がある。ただし、両者の分類は明確なものでなく、全体としては、極めて近似した時間に統一されうるものである。

### 遺構について

検出された古墳時代前半の遺構は、竪穴住居跡1軒と、墳墓9基である。

このうち竪穴住居跡は1軒で、台地先端部から検出された。集落は東側に拡がっていると思われるが、台地のより根本に展開する墳墓群との位置関係は、やや不自然さを感じさせる。土器はより古い型の甕を床面から出土しており、また付近からもやはり古い特徴をもつ高杯破片（遺構外－2）を出土していることから、墳墓群に比べ、やや古い時期（直前であろう）の集落とも考えられる。

また、古墳群は、やはり古い型の土器を底面などから出土しているが、全体としては、覆土中ながらより新しい特徴を示したものを多く出土している。9基の墳墓群は、3つの小群（A・B・C）に分けて捉えることができる。

A群は4・5・6号遺構の3基で、調査区南西端部に近接して存在する。B・C群のように、主体となる大型周溝墓は検出されていないが、調査範囲外に存在するか、又は後述のように、C

群（＝3号）との関連も考えられる。4号遺構は「コ」字型を呈しており、6号も同型の可能性が高く、隣接するB群とは形状を異にしている。

B群は、2号大型円形周溝墓を軸として、北側に寄り添う様に展開する7・8・9・10号の5基である。遺構の説明において既述したように、7号遺構の配置及び形状は、2号及び9号に規制され、また、2号を強く意識して作られている。10号の在り方もまた2号を強く意識してのことであろう。これに対し9号は、2号とはやや間を置いて配されている。規模も本遺跡中3番目に大きく、7・10号に比べ2号からの自立性はより強いものと思われる。2号に対する方向は北に最も近く、2号に続いて作られたものであろう。8号は、位置的には7号と対象的であるが、より9号に近く配されており、時間的連続性あるいは従属性の強さの表れと考えられる。10号は甕棺墓であるが、やはり、2号を強く意識して配されており、2号のほぼ北方向に、周溝の淵を切って作られている。このようにB群は2号を中心に北に向かって、より近くに強く規制されており、全体としては、2号の中心点から北に向かって10号を通り、9号の中心を直線的に結ぶ線を軸として対象形を作っている。

C群は3号一基のみで、2号と並んで、墳墓群の主幹となる大型方周溝墓である。2号の様に小規模墓を近くに縦属させていない。ただ、形状は「コ」字状である可能性が強く、A群との関連が考えられる。

尚、各群の成立時期が問題となるが、A群－4号、B群－2号、C群－3号、各遺構出土の土器を比べると、3号底面から出土している1の壺をもって最古とし、C群→B群→A群へと推移していったものとしたい。

## お わ り に

III章（遺跡の歴史的環境）において既述したように、養老川流域における古墳時代の大型墳墓の存在は、従来の知見では平蔵川（支流）との分岐点を南限としていた。高滝地区における番後台遺跡の集落跡調査によって、周辺におけるその存在が推定されてはいたものの、今回の調査によってそのものの確認に届らず、不十分ではあるが、ある程度の実体を把握できた事は大きな成果であった。

本報告のおわりに再して、問題となるのは、これらの大型墳墓が存立した生産的基盤であろう。皿郷田茂周辺の水田化としては、多くの堰があるが、これは近世以降のもので、本遺跡に隣接する番後台～本郷地区の灌漑は明治初期の藤原式水車の発明以後である。本台地面が水田化されたのは大正9年の土地改良によるという。これは、段丘面と養老川（本流・支流ともに）との比高差が高く、灌漑のためには高度な技術と労働が必要とされるためで、古墳時代における水田利用



地はごく限られていたものと思われる。皿郷田茂遺跡と番後台遺跡においては、一般の集落と比べ、漁労や狩猟を特徴づける遺物の出土はなく、やはり、畑作としての農業を生産の基盤としていたものと思われる。しかし、いずれにしても可耕地の面積は狭いものとならざるを得ず、このような生産基盤の弱さは、下流域に展開する同時期の墳墓に比べ、本墳墓群を著しく小規模なものにしていると言えよう。





皿郷田茂遺跡周辺の航空写真（1983年11月19日撮影 北から）



1. 皿郷田茂遺跡調査区域航空写真（1983年11月19日撮影 北から）



2. 遺跡遠景（西側よりのぞむ）



1. 調査区南西側遺構群検出状況（南側よりのぞむ）



2. 調査区南西側遺構群検出状況（東側よりのぞむ）



1. 調査区南西側  
遺構検出状況  
(西側よりのぞむ)



2. 調査区南西側  
遺構検出状況  
(南側よりのぞむ)



3. 調査区南西側  
遺構検出状況  
(北西側よりのぞむ)



1. 1号遺構  
(住居跡)全景  
(南東側より  
のぞむ)



2. 1号遺構  
遺物出土状況  
(南東側より  
のぞむ)

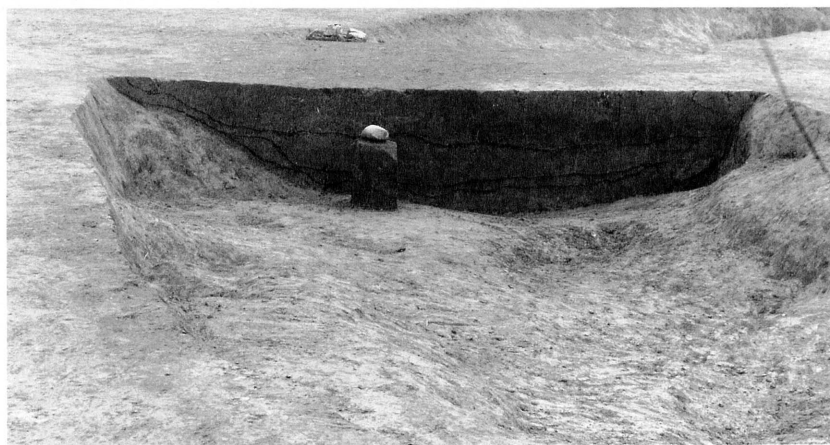


3. 1号遺構  
南東壁際  
遺物出土状況  
(北西側より  
のぞむ)

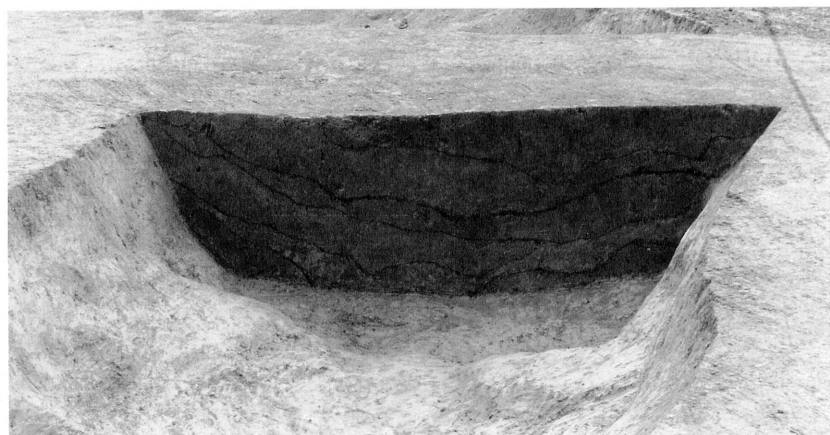




1. 2号遺構  
(円形周溝墓)  
全景  
(西側よりの  
ぞむ)



2. 2号遺構  
C'-C土層セ  
クション  
(北側よりの  
ぞむ)



3. 2号遺構  
B'-B土層セ  
クション  
(北側よりの  
ぞむ)



1. 2号遺構  
(円形周溝墓)  
南西付近近景  
(北西側よりのぞむ)



2. 2号遺構  
南側近景  
(東側よりのぞむ)



3. 2号遺構  
東側近景  
(南西側よりのぞむ)





1. 3号遺構（方形周溝墓）全景（南東側よりのぞむ）



2. 3号遺構南西溝近景（南東側よりのぞむ）

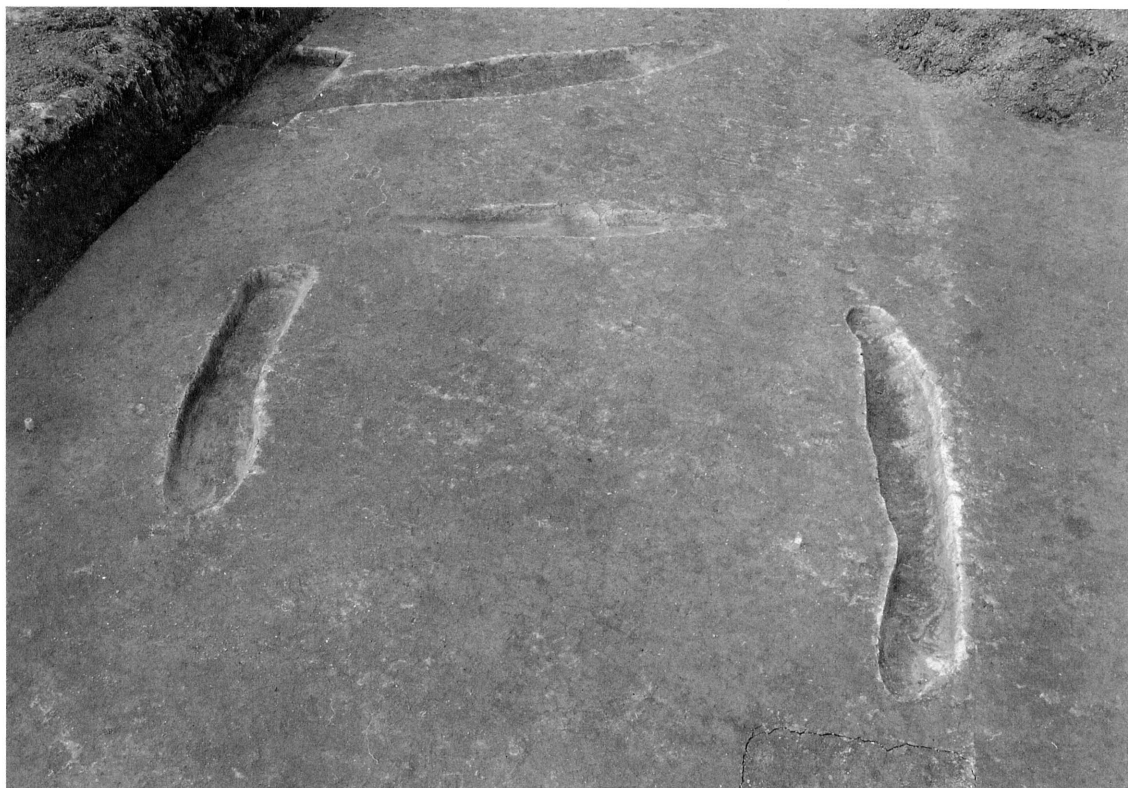


1. 3号遺構（方形周溝墓）全景（南西側よりのぞむ）



2. 3号遺構南東溝近景（北東側よりのぞむ）





1. 4号遺構（方形周溝墓）全景（南東側よりのぞむ）



2. 4号遺構北東溝近景  
（北西側よりのぞむ）



3. 4号遺構南西溝近景  
（北西側よりのぞむ）



1. 5号遺構（方形周溝墓）全景（東側よりのぞむ）



2. 6号遺構（方形周溝墓）全景（東側よりのぞむ）



1. 7号遺構（方形周溝墓）全景（北側よりのぞむ）

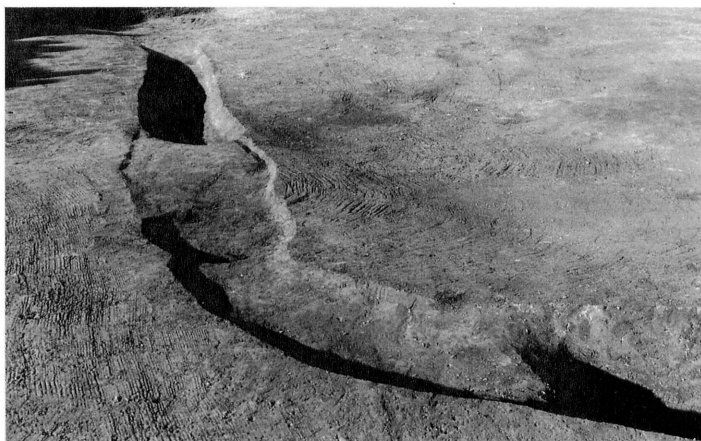


2. 8号遺構（方形周溝墓）全景（北側よりのぞむ）





1. 9号遺構（方形周溝墓）  
全景  
（北側よりのぞむ）



2. 9号遺構西溝近景  
（南側よりのぞむ）



3. 9号遺構東溝近景  
（南側よりのぞむ）

1. 10号遺構  
(甕棺墓)  
全景  
(南側から)



2. 10号遺構  
全景  
(西側から)



3. 10号遺構  
(西側から)



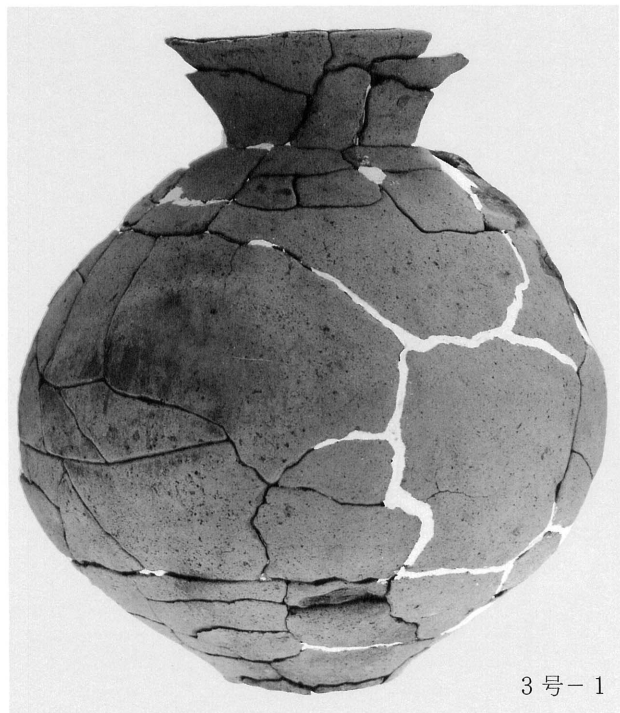
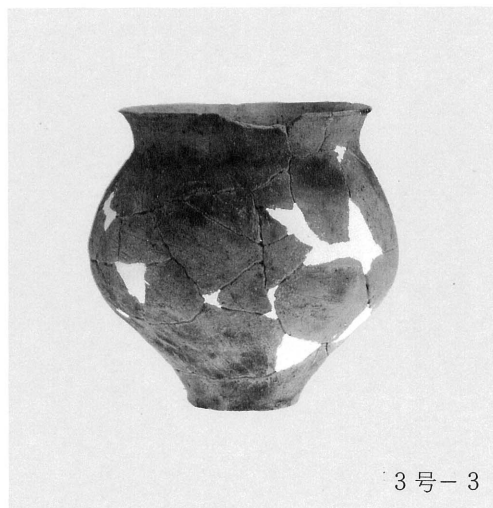
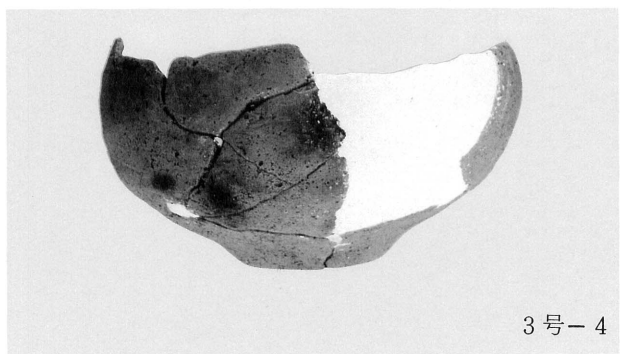
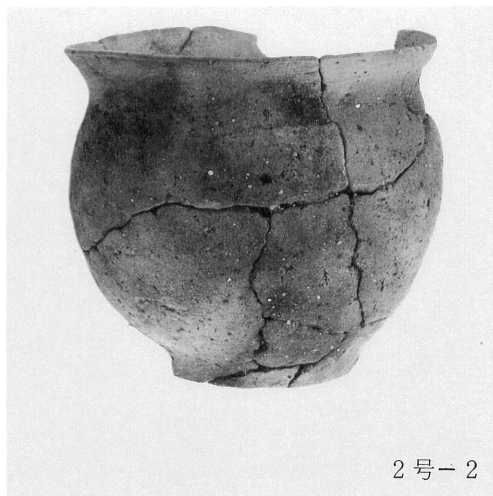
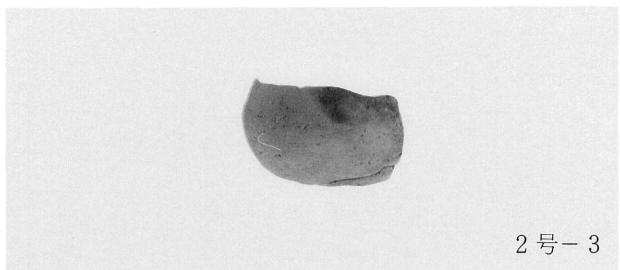
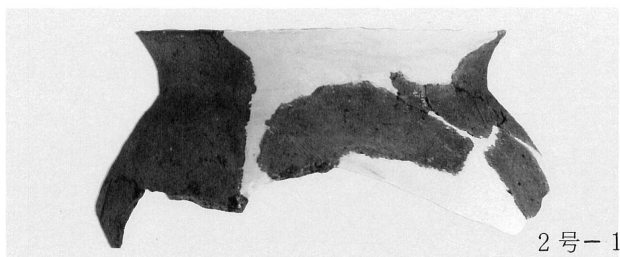


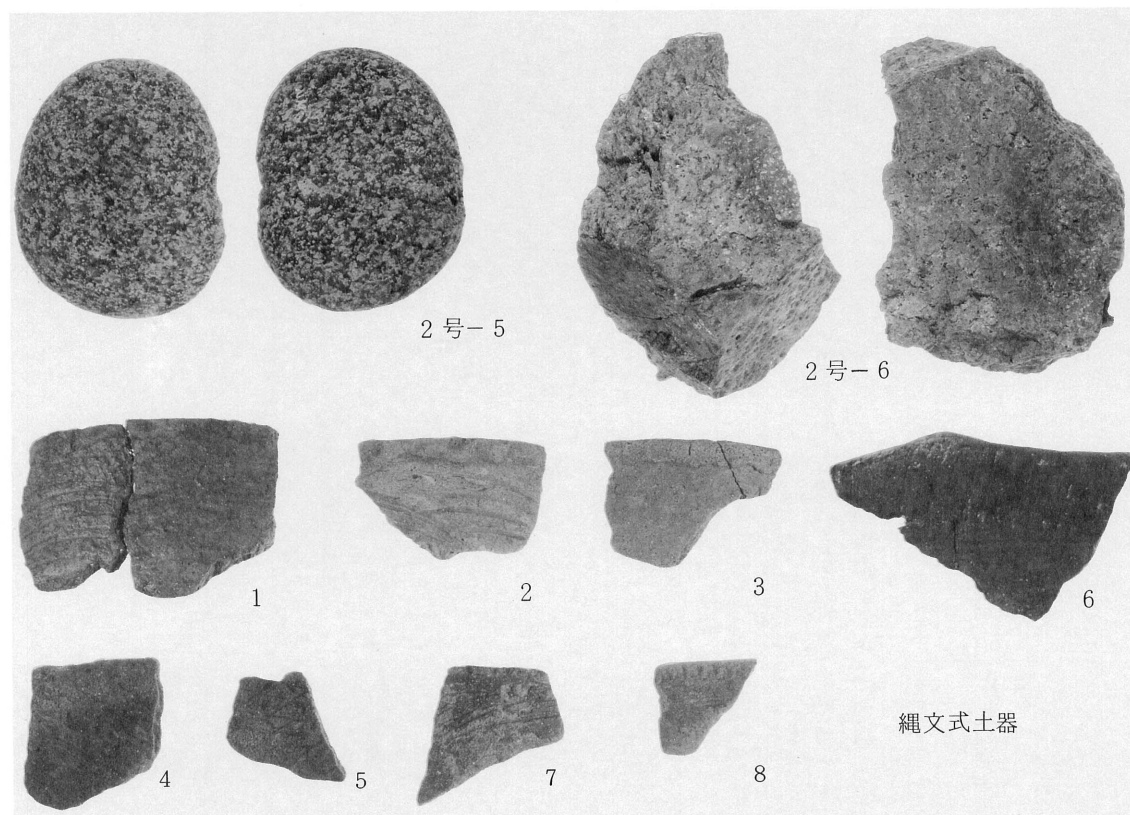
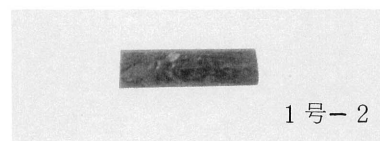
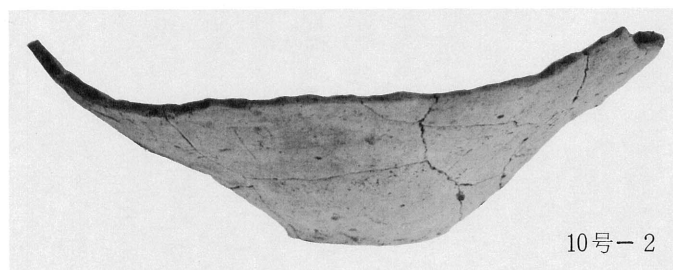
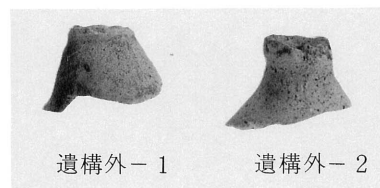
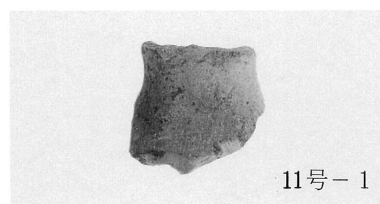
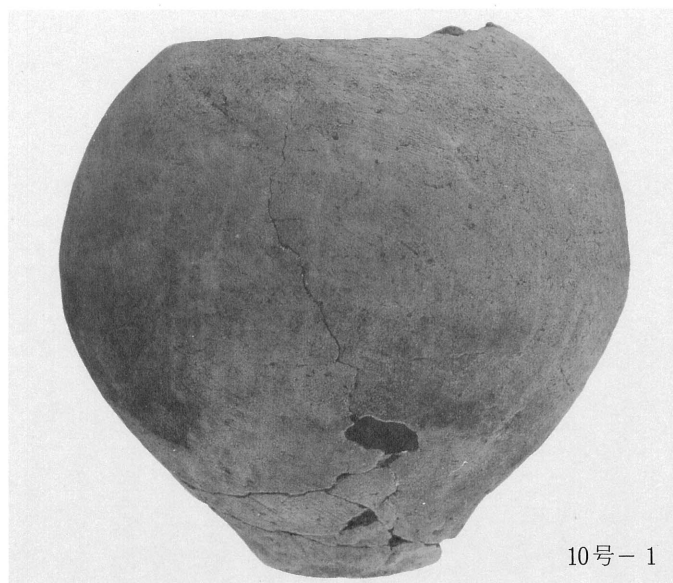


1. 11号遺構（溝）全景（南東側よりのぞむ）



2. 11号遺構全景（北西側よりのぞむ）





—— 千葉県市原市 ——

## 皿 郷 田 茂 遺 跡

昭和59年 3 月 7 日 印刷

昭和59年 3 月14日 発行

編 集 財団法人 市原市文化財センター

発 行 市 原 市 教 育 委 員 会  
市 原 市 加 茂 土 地 改 良 区

印 刷 三 陽 工 業 (株) 市 原 支 店

千葉県市原市五井5510の1  
TEL 0436(22)4348